

真鏡寺後遺跡 V

— E地点の調査 —

2010

本庄市遺跡調査会

しん きょう じ うしろ い せき
真 鏡 寺 後 遺 跡 V

— E 地点の調査 —

2010

本庄市遺跡調査会

序

本庄市は、かつて中山道一の宿場町として繁栄を誇り、中世においては武蔵七党の中でも最大の勢力を誇った、児玉党の本拠地としても知られています。また市内には、埼玉県重要選定遺跡である旭・小島古墳群や長沖古墳群をはじめ、旧石器時代から近代まで、数多くの遺跡が分布しています。

本書は、昭和63年に北部金属株式会社による牛舎建設に伴う事前の記録保存を目的として実施した、本庄市児玉町塩谷に所在する真鏡寺後遺跡E地点の発掘調査の成果を記録したものです。この発掘調査では、奈良・平安時代の13軒の竪穴住居跡や数多くの土坑、掘立柱建物跡、真鏡寺館の堀等が確認され、貴重な資料を得ることができました。今回の調査地点では、真鏡寺館の掘割の内側には、他の調査地点で確認された土塁が構築されておらず、柵列が廻っていたことが明らかとなりました。このような新たな発見は、児玉党塩谷氏の居館とされる中世館跡の、往時の姿を彷彿とさせるものです。

本報告書が広く活用されるとともに、文化財保護意識の高揚と本庄市という地域の歴史に対する理解を深めるための一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書の刊行に至るまで、文化財の保護に対する深いご理解とご尽力を賜りました北部金属株式会社をはじめ、関係諸機関ならびに関係各位、さらに住民の皆様のご多大なるご協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

平成22年8月

本庄市遺跡調査会
会長 茂木 孝彦

例 言

1. 本書は、埼玉県本庄市児玉町塩谷字真鏡寺90-2に所在する、真鏡寺後遺跡E地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、牛舎建設に伴う事前の記録保存を目的として、昭和63年3月1日から5月10日の期間に実施した。
3. 発掘調査は、業務委託を受けた旧児玉町遺跡調査会が実施し、その調査担当には鈴木徳雄があった。
4. 発掘調査から本書刊行に至る経費は、すべて北部金属株式会社が負担した。
5. 整理調査は、本庄市遺跡調査会が、株式会社歴史の杜に委託して実施した。
6. 本書の編集は、村上章義（株式会社歴史の杜）が行なった。
7. 本書の執筆は、第1章を本庄市教育委員会事務局が、第2章を倉田功が、第4章第3節、第4節を向出博之が、他を村上が行なった。
8. 整理調査・報告書作成は、以下の体制で行なった。（敬称略・五十音順）

遺物実測	藤原信子、田中浩江、深井美紀
遺物図トレース	藤原信子、田中浩江
遺構図トレース	藤原信子、深井美紀
報告書レイアウト	深井美紀、村上章義
遺物写真撮影	山際哲章

9. 本書で使用した遺構写真は、調査担当者が撮影した。
10. 本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他報告書に関係する資料は、本庄市教育委員会において保管している。
11. 報告書を作成するにあたり、住居番号をA地点からの通し番号と整合させたため、以下のとおりE地点の住居番号を変更した。

旧番号	新番号
第1号住居跡	→ 第54号住居跡
12. 本書掲載の第1図は、国土地理院発行1/25,000地形図「藤岡」及び「本庄」を使用し、第2図は、「真鏡寺後遺跡Ⅳ」（恋河内、2009）の第3図及び「真鏡寺後遺跡Ⅲ」（恋河内、1991）の第7図から作成した。
13. グリッドは日本測地系に基づき設定されたものである。
14. 方位はグリッドの座標北を用いた。
15. 遺物の色調は、「新版標準土色帖」（2001年版）による。
16. 住居跡の規模は、カマドのある壁の方位を基準に作成した住居跡に外接する四角形の南北長と東西長で表現した。住居跡の主軸は、カマドのある壁の方位と直交する方位とした。
17. 遺物観察表中の口径等の法量の数値は、それぞれ接点からの距離である。単位は「cm」である。白玉、土製紡錘車では、口径・器高は、それぞれ面径・厚さである。

真鏡寺後遺跡E地点発掘調査組織

児玉町遺跡調査会（昭和63年度：抜粋）

会 長	野口 敏雄	児玉町教育委員会教育長
理 事	田島 三郎	児玉町文化財保護審議委員長
	清水 守雄	児玉町文化財保護審議委員
	日向 國俊	児玉町文化財保護審議委員
	中兼 久偉	児玉町文化財保護審議委員
	武内 和雄	児玉町文化財保護審議委員
	中林 重	児玉町教育委員会社会教育課長
幹 事	前川 由雄	〃 社会教育係長
	金子 幸弘	〃 社会教育係
	恋河内昭彦	〃 社会教育係
調査員	鈴木 徳雄	児玉町教育委員会社会教育課社会教育係
	徳山 寿樹	児玉町遺跡調査会調査補助員
	尾内 俊彦	児玉町遺跡調査会調査補助員

真鏡寺後遺跡E地点整理・報告組織

本庄市遺跡調査会（平成22年度）

会 長	茂木 孝彦	本庄市教育委員会教育長
理 事	清水 守雄	本庄市文化財保護審議委員
	巖塚 修	本庄市教育委員会事務局長（会長代理）
監 事	八木 茂	本庄市監査委員事務局長
	田島 弘行	本庄市会計課長
幹 事	金井 孝夫	本庄市教育委員会文化財保護課長（事務局長）
	鈴木 徳雄	〃 副幹事兼課長補佐
	太田 博之	〃 埋蔵文化財係長
	恋河内昭彦	〃 埋蔵文化財係主査
	大熊 季広	〃 埋蔵文化財係主査
	松本 完	〃 埋蔵文化財係主任
	松澤 浩一	〃 埋蔵文化財係主任
	の野 善行	〃 埋蔵文化財係臨時職員

目次

序	
例言	
目次	
第1章 発掘調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	2
第3章 遺跡の概要	5
第4章 検出された遺構と遺物	5
第1節 竪穴式住居跡	5
第2節 掘立柱建物跡	25
第3節 土坑・ピット	29
第4節 館廻跡・櫓列	33
第5章 まとめ	34
<参考文献>	34
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 周辺主要道路	2	再21図 第59号住居跡出土遺物	17
第2図 調査地点位置図	3	第21図 第60号住居跡	18
第3図 E地点全体図	4	第23図 第60号住居跡掘り方	19
第4図 第54号住居跡	6	第24図 第60号住居跡カマド	19
第5図 第54号住居跡カマド	7	第25図 第60号住居跡出土遺物	20
第6図 第54号住居跡出土遺物	7	第26図 第61号住居跡	21
第7図 第55号住居跡	8	第27図 第61号住居跡カマド	22
第8図 第55号住居跡カマド	9	第28図 第61号住居跡出土遺物	22
第9図 第55号住居跡出土遺物	9	第29図 第62号住居跡掘り方	23
第10図 第56号住居跡	10	第30図 第63号住居跡	24
第11図 第57号住居跡	11	第31図 第63号住居跡カマド	24
第12図 第57号住居跡カマド	11	第32図 第63号住居跡出土遺物	25
第13図 第57号住居跡出土遺物	11	第33図 E地点第1号掘立柱建物跡	26
第14図 第57B号住居跡	12	第34図 E地点第1号掘立柱建物跡変遷	27
第15図 第57B号住居跡カマド	12	第35図 E地点第1号掘立柱建物跡出土遺物	28
第16図 第58号住居跡	13	第36図 E地点第2号掘立柱建物跡	28
第17図 第58号住居跡カマド	13	第37図 E地点土坑(1)	29
第18図 第58号住居跡出土遺物	14	第38図 E地点土坑(2)	31
第19図 第59号住居跡	15	第39図 E地点館廻跡・櫓列	33
第20図 第59号住居跡カマド	16		

表目次

第1表 第54号住居跡出土遺物観察	7
第2表 第55号住居跡出土遺物観察	9
第3表 第57号住居跡出土遺物観察	11
第4表 第58号住居跡出土遺物観察	14
第5表 第59号住居跡出土遺物観察	17
第6表 第60号住居跡出土遺物観察	20
第7表 第61号住居跡出土遺物観察	23
第8表 第63号住居跡出土遺物観察表	25
第9表 E地点第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表	28

第 I 章 発掘調査に至る経緯

本報告にかかる真鏡寺後遺跡 E 地点の発掘調査は、牛舎建設に伴って失われる埋蔵文化財の記録保存のために実施されたものであり、発掘調査に至る経緯の概要は、下記のとおりである。

昭和 62 年 7 月 6 日、北部金属株式会社代表取締役武政昌代より埼玉県児玉郡児玉町大字塩谷（現本庄市児玉町塩谷）字真鏡寺後 90- 2 の土地、合計 1,935㎡に牛舎建設の計画があり、これにかかる『開発予定地内における埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて』の照会文書が（旧）児玉町教育委員会〔以下（旧）を省略〕に提出された。当該区域は周知の埋蔵文化財包蔵地である、真鏡寺後遺跡（No.54-107）に該当していることから、町教育委員会は昭和 62 年 7 月 17 日付児教社第 110 号「文化財の所在及び取り扱いについて」において、周知の埋蔵文化財包蔵地内であるため現状変更しようとする場合は事前に町教育委員会と協議するとともに、埋蔵文化財の包蔵状況を確認するための試掘調査を実施し、文化財保護法の規定に則って事業を実施するよう回答した。この回答を受け、同年 8 月 5 日、北部金属株式会社代表取締役武政昌代より「試掘調査依頼書」が町教育委員会に提出され、試掘調査を実施し平安時代の竪穴住居跡や土坑等の埋蔵文化財の所在が確認された。この試掘調査の結果を踏まえ、町教育委員会は昭和 62 年 8 月 19 日付児教社第 137 号で、「文化財の所在確認試掘調査の結果について」において、当該区域に埋蔵文化財が確認され現状保存が望ましく、やむをえず現状変更する場合は、事前に県および町教育委員会と協議するよう回答し、北部金属株式会社と埋蔵文化財保護のための協議を行った。しかし建設計画の変更は困難であるとの結論に達し、事業主より児玉町遺跡調査会長に発掘調査の依頼がなされ、児玉町教育委員会の指導に基づいて、児玉町遺跡調査会と北部金属株式会社との間で埋蔵文化財保存事業委託契約を締結し、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

（本庄市教育委員会事務局）



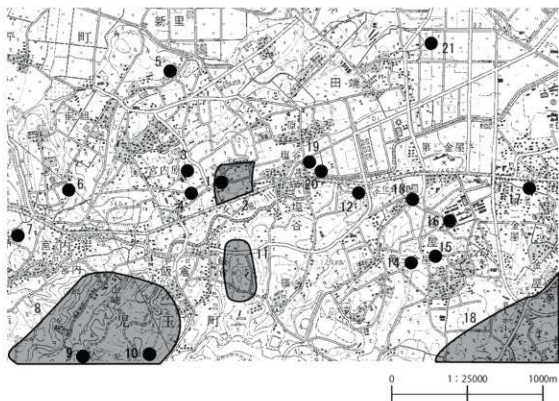
真鏡寺後遺跡遠景（南東から）

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

真鏡寺後遺跡（1）は、埼玉県本庄市児玉町塩谷字真鏡寺後を中心に、約100,000㎡の広範囲にわたる、縄文時代前期から平安時代中期の集落遺跡と中世の真鏡寺館跡の複合遺跡である。遺跡コードはNo.54-107である。今回の調査地点であるE地点は、埼玉県本庄市児玉町塩谷字真鏡寺90-2に所在する。中世の真鏡寺館跡内に位置し、平安時代を中心とする集落遺跡である。本遺跡のある本庄市児玉町は、埼玉県の北端部に位置し、地形的には、八王子構造線を境に西部の上武山地と北東部の平野部に大きく分かれる。上武山地の北東端から北東方向に伸びる児玉丘陵が存在するが、小山川や女堀川など上武山地を水源とする河川によって開析されて、半島状を呈している。本遺跡は、南側を女堀川（旧赤根川）に、北側を金鑽川によって開析された児玉丘陵の一支丘上に立地する。

本遺跡の周辺には、旧石器時代以降の各時期の遺跡が存在しているが、本調査地点では、弥生時代以前の遺物、遺構が検出されていないため、古墳時代以降の遺跡について触れる。

古墳時代の遺跡は、比較的多く調査されている。前期の遺跡は、丘陵上と丘陵下の台地上に立地する。新羽根倉遺跡（5）、前組羽根倉遺跡（6）、塩谷下大塚遺跡（12）、倉林後B遺跡（15）、ミカド西遺跡（19）、十二天遺跡（21）がある。中期の遺跡は、丘陵上を中心に立地する。本遺跡、枇杷橋遺跡（13）、倉林後遺跡（16）、金屋北原遺跡（17）がある。後期の遺跡は、後半に周辺の丘陵上に立地する。本遺跡や下原北遺跡（3）、下原南遺跡（4）、念仏塚遺跡（14）、倉林後B遺跡、ミカド遺跡（20）がある。古墳は、本遺跡と旧赤根川を挟む南の丘陵上に飯倉古墳群（11）が、南東約1.8



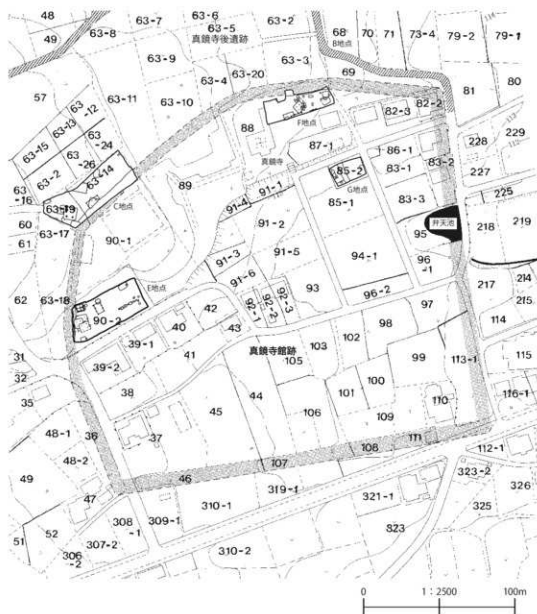
第1図 周辺主要遺跡

kmに長沖古墳群（18）が存在する。

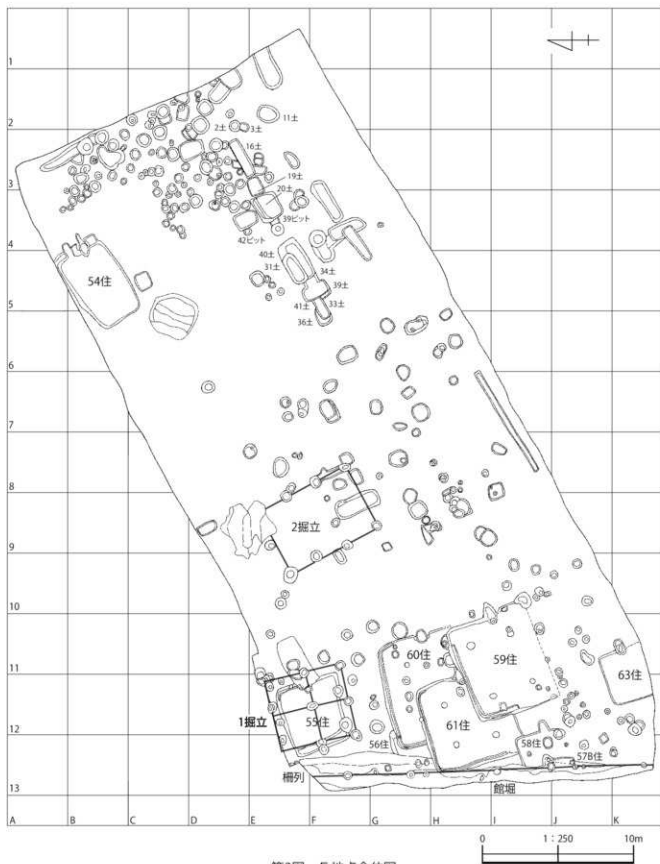
奈良時代の遺跡は、旧赤根川の兩岸の丘陵縁辺部に集落が立地する。本遺跡、天田遺跡（7）、下原南遺跡がある。南の山崎谷を中心とした丘陵部には瓦窯跡の金草窯跡（9）や飯倉窯跡（10）をはじめとする児玉窯跡群（8）が存在する。

平安時代の遺跡は、奈良時代と同様に丘陵縁辺部に立地する。10世紀以降には、丘陵下の台地上に新たに集落が見られるようになる。ミカド遺跡、ミカド西遺跡、十二天遺跡がある。

中世の遺跡は、児玉党塩谷氏の居館と推測される本遺跡南部の真鏡寺館跡（2）がある。その他に、ミカド遺跡で掘立柱建物跡などが検出されている。



第2図 調査地点位置図



第3図 E地点全体図

第三章 遺跡の概要

E地点は、本庄市児玉町塩谷字真鏡寺90-2に所在する。真鏡寺館跡の西辺を南北に区画する館堀の内側にあたる。調査区内の地形は、南東方向に傾斜しており、その比高差は、最大で4m以上である。

調査区内では、竪穴住居跡が9軒（建て替えを含めれば13軒）、掘立柱建物跡が2棟（建て替えを含めれば4棟）、土坑・ピットが200基以上、館堀が1条、柵列が1列検出されている。

竪穴住居跡は、調査区の東部で検出された第54号住居跡を除き、主に西側でまとまって検出された。館堀に切られていることから、さらに堀を越えた西側に住居群が広がることが予想される。住居跡の主な時期は、古墳時代終末期と推定される第55号住居跡を除き、奈良・平安時代である。住居跡の主軸方向は、概ね東を向く。カマドの焚き口付近に小ピットをもつもの（第55、59、61号住居跡）ともたないもの（第54、57、58、60、63号住居跡）とに分かれる。

掘立柱建物跡は、4棟検出された。第55号住居跡と重複する3棟は、柱穴の共有などから建て替えと判断した（第1号掘立柱建物跡）。調査区の中央付近にて、第2号掘立柱建物跡が検出されている。主軸の方向は、第1号建物跡が住居跡と概ね同一の方向であるのに対し、第2号建物跡は異なる。

調査区の西端で検出された館堀跡は、現地表面に残るランドマークと併せて、C地点、F地点で検出された館堀跡に接続すると推定される。F地点で検出されたような堀の内側の土塁跡は検出されなかったが、柵列と推定されるピット列が検出された。

200基以上検出された土坑・ピットは、大きく西部、中央部、東部に分かれる。東部に大量に集中するピット群は、掘立柱建物跡を構成する可能性がある。

第四章 検出された遺構と遺物

第1節 竪穴式住居跡

第54号住居跡（第4・5・6図、図版1）

本住居跡は、調査区北東部のB-4グリッドに位置する。重複する遺構も無く、遺存状態は、比較的良好である。

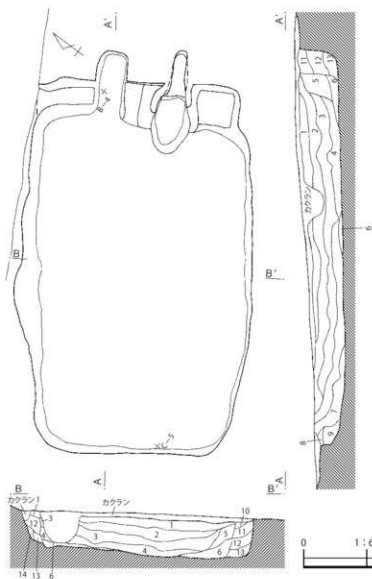
平面形は、東壁が西壁よりもわずかに広い、北東～南西方向が長い隅丸長方形である。規模は、東西方向が5.970m、南北方向が3.795mである。住居跡の主軸方位はN-56.3°-Eである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、深さは南壁で遺構確認面から63.5cmとなっている。床面は、ほぼ平坦であるが、南西方向にやや傾斜しており、比高差は15～33.5cmとなっている。東壁沿いに、幅13～23cm、床面との比高差22cm前後の一段高い部分が認められた。

カマドは、住居東壁の中央よりやや南寄りの位置に、壁に対してほぼ直角に築かれている。規模は、全長1.68m・最大幅89cmを測る。住居跡の主軸方位はN-55.5°-Eである。燃焼部は奥行き93cm、最大幅62cmの楕円形を呈している。燃焼面は床面とほぼ同じ高さであるが、焚き口付近は床面よりも4cm低い。燃焼部の奥壁の高さは、21cmである。煙道部は、幅20～52cm、長さ74cmで、傾斜角19.5°で上り、奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。

柱穴、貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。

出土遺物は、埋没土中より、土師器の甕の破片を主体として大量に出土しているが、一個体にまで接合するものはほとんどないため、本住居跡で使用されたものではなく、本住居跡の埋没過程で混入したものと考えられる。カマド燃焼部の埋没土中より土師器甕 (No. 1・2) が出土している。直接接合はしなかったが、一個体と考えられる。他に住居埋没土中より、土師器の平底環 (No. 3)、須恵器碗 (No. 4) が出土している。

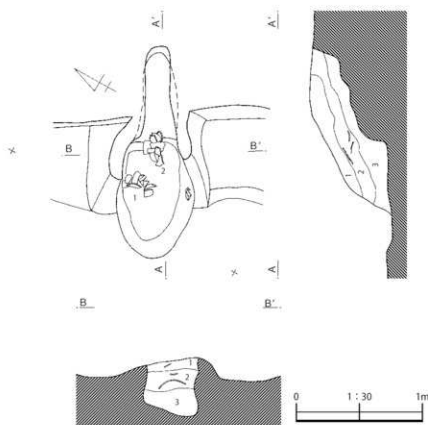
時期は、遺物から9世紀中ごろと推定される。



第54号住居跡土層説明

- 第1層: 明黒褐色土層(ローム粒、火山灰を含みローム風化土を少量に混入する。しまりはあるが粘性はなし。)
- 第2層: 暗茶褐色土層(ローム粒を少量含み、ローム風化土を多量に混入する。しまり、粘性共に弱い。)
- 第3層: 黒褐色土層(ローム粒、炭化物粒を少量含み、ローム風化土を少量混入する。しまりはあるが粘性はなし。)
- 第4層: 明茶褐色土層(ローム粒、白色粒子を含み、ローム風化土を多量に混入する。しまり、粘性共に有する。)
- 第6層: 黒色土層(ローム粒、白色粒子を微量含み、しまり、粘性共に有する。)
- 第5層: 暗茶褐色土層(ローム粒、白色粒子を微量含み、ローム風化土を少量混入する。しまり、粘性共に乏しい。)
- 第7層: 黄灰褐色土層(黄灰色粘土を多量含み、小礫を多く混入する。しまり、粘性共に有する。)
- 第8層: 暗褐色土層(粘土ブロック、白色粒子、ローム微粒を均一に含む。しまりはなく粘性弱い。)
- 第9層: 明黒褐色土層(白色粒子、ローム粒を多量に含み、ローム風化土を均一に含む。しまり、粘性共に有する。)
- 第10層: 暗茶褐色土層(火山灰粒、白色粒子を微量含む。しまり、粘性共にない。)
- 第11層: 茶褐色土層(白色粒子、炭化物粒、ローム微粒を少量含む。しまりはあるが粘性は弱い。)
- 第12層: 暗茶褐色土層(ローム微粒、白色粒子を少量含み、黒褐色土を少量混入する。しまり、粘性共に有する。)
- 第13層: 明黒褐色土層(白色粒子、炭化物微粒を微量含み、ローム風化土を混入する。しまりはあるが粘性はない。)
- 第14層: 明茶褐色土層(池山の崩壊土層、ローム風化土を含む。しまり、粘性共になし。)

第4図 第54号住居跡



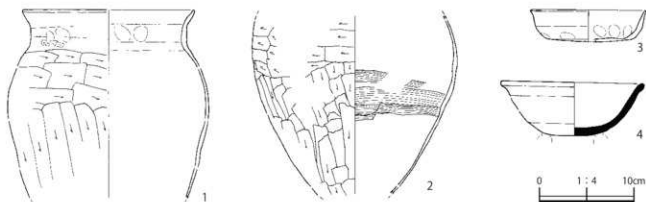
第5図 第54号住居跡カマド

第54号住居跡カマド土層説明

第1層:明茶褐色土層(焼土粒、焼土小ブロックを均一に、炭化物粒を少量含む。少々しまっているが粘性はない。)

第2層:茶褐色土層(焼土粒、焼土ブロック、炭化物粒を多量に含む。少々しまっているが、粘性はない。)

第3層:暗茶褐色土層(灰分を多量に、炭化物粒、焼土粒、ロームブロックを少量含む。しまり、粘性共にない。)



第6図 第54号住居跡出土遺物

第1表 第54号住居跡出土遺物観察表

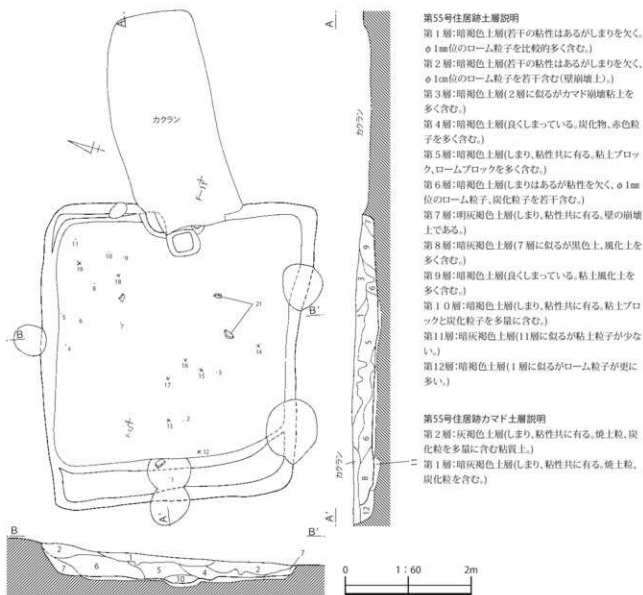
No.	種別 数量	①口径 ②底径	③高さ ④残存度	⑤地成 ⑥成形	⑦外装色調 ⑧内装色調	⑨外装図案 ⑩内装図案	⑪色調(粘土) 備考
1	土師器 1	①18.2 ②19.0	③(19.0)	⑤酸化焼 ⑥輪削	⑦明赤褐色 (Hae5YR 5/6) ⑧明赤褐色 (Hae5YR 5/6)	⑨口:ヨコナデ。肩:肩押さえのちヨコナデ。肩・胴:斜線ヘラケズリ。肩・胴:縦線ヘラケズリ。	⑪明赤褐色 (Hae5YR 5/6)
2	土師器 1	①大21.7 ②小7.7	③肩一層 1/4 ④肩一層 2/3	⑤酸化焼 ⑥輪削	⑦明赤褐色 (Hae5YR 5/6) ⑧褐色 (Hae7.5YR 6/5)	⑨口一層:肩押さえのちヨコナデ。肩一層:縦線ヘラケズリ。肩・胴:横線ヘラケズリ。肩・胴:縦線ヘラケズリ。	⑪2と同一器体と推定される。 ⑫褐色 (Hae7.5YR 6/5)
3	土師器 1	①12.0	③3.35	⑤酸化焼	⑦灰-赤褐色 (Hae7.5YR 5/3)	⑨口:肩押さえのち回転ヘラ削りのち強いヨコナデ。肩:肩押さえのちナデ。肩:ヘラケズリ。	⑪灰-赤褐色 (Hae7.5YR 5/3)
4	土師器 1	①14.9 ②6.75	③5.65 ④1/2	⑤輪削 ⑥丸口	⑦灰-黄褐色 (Hae7.5YR 5/4) ⑧灰-黄褐色 (Hae10YR 7/2) ⑨黄褐色 (Hae2.5YR 6/1)	⑨口一層:肩押さえのちヨコナデ。底:肩押さえのちナデ。 ⑩口:つよいロコナデ(輪)。肩:ロコナデ。底:回転糸切り(右)のちナデ。 ⑪口一層:ロコナデ。	⑪黄褐色 (Hae2.5YR 7/3) 高台穴焼。

第55号住居跡(第7・8・9図、図版1)

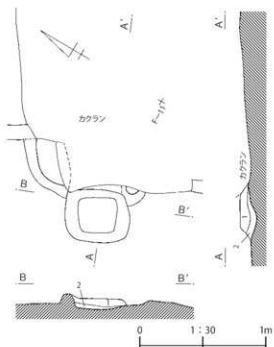
本住居跡は、調査区北西隅のE-11、F-11グリッドに位置する。第1号掘立柱建物跡の柱穴を切っている。重機による擾乱によって切られたカマドを除き、遺構の遺存状態は比較的良好である。

平面形は、北壁と東壁がほぼ直交するが、南壁が大きく内傾しており、東壁が長く西壁が短い、やや形の崩れた台形を呈している。規模は、南北方向の最残存長が4.785m、東西方向の最残存長が4.875mである。主軸方向は、N-72.6°-Eである。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは、確認面が比較的高い北壁を除き、各壁とも15cm～20cm前後に収まっている。

床面は、床下に第1号掘立柱建物跡のP7が位置する中央付近が大きく凹んでおり、さらに10～15cm前後の比高差が生じている。やや起伏が見られ、南東側に向かって若干傾斜している。比高差は10cm前後である。また、西壁沿いに幅30～40cm前後、床面から5cm前後の一段高い部分が認



第7図 第55号住居跡

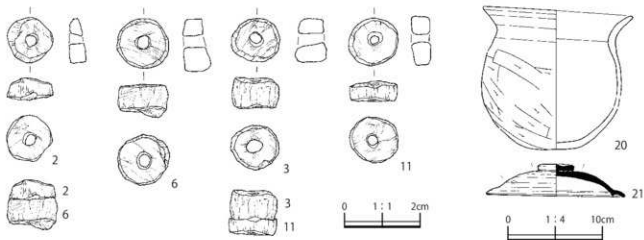


第8図 第55号住居跡カマド

められた。この一段高い部分も床面と同様に南側に向かって若干傾斜している。

カマドは、住居東壁の中央の位置で検出されたが、重機による攪乱によって大部分が破壊されており、焚き口と袖の一部を除き、遺存していなかった。遺存状態の悪さから、カマドの主軸は不明であるが、焚き口前方の方形の小穴の南北辺と直交する方向を主軸とすれば、 $N-59.5^{\circ}-E$ であり、壁に対して幾分北向きに構築されていると推定される。規模は、残存長54cm(小穴を含めれば83cm)、残存幅98cm、焚き口の幅50cmである。袖は、壁の手前の床面上に、炭化粒、焼土粒、ローム粒を若干含む明灰褐色の粘質土を盛り上げて構築されており、燃燒部は、平面形状は不明であるが、屋内に構築されたと推定される。燃燒面は床面とほぼ同じ面で、焚き口の手前に深さ約5cmの小穴を有する。

ビット、貯蔵穴は検出されなかった。壁溝は、調査時にはカマドを除いて全周するとしたが、整理調査時に住



第9図 第55号住居跡出土遺物

第2表 第55号住居跡出土遺物観察表

No.	種別 器名	口径 口径径	口径高 口径深度	口径底 口径底	口径底 口径底	口径底 口径底	口径底 口径底	口径底 口径底	口径底 口径底
2	焼石製品 白土	口径 1.2 口径 0.35	口径 0.6 口径 1/1	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -
3	焼石製品 白土	口径 1.25 口径 0.4	口径 0.85 口径 1/1	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -
6	焼石製品 白土	口径 1.35 口径 0.35	口径 0.85 口径 1/1	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -
11	焼石製品 白土	口径 1.3 口径 0.4	口径 0.5 口径 1/1	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -
20	土製器 小壺	口径 15.75 口径 4.0	口径 14.8 口径 2/3	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -
21	土製器 壺	口径 4.0 口径 14.6	口径 3.35 口径 1/1	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -	口径 - 口径 -

居内のレベルを検討したところ、壁溝内よりも床面のレベルが低いため、壁溝の存在は認められないと判断を変更した。

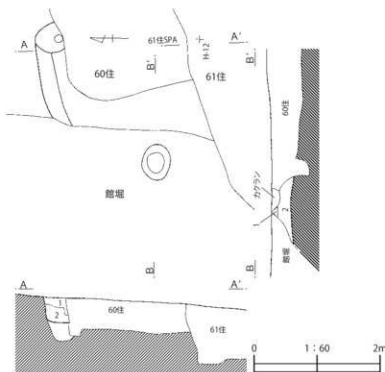
出土遺物は、住居跡の北東部と南西部から、滑石製の白玉が11点(No. 1～11)、鉄製品の破片(No.12～19)が8点出土している。白玉は、石材の色調から二種類に分かれるとみられ、それぞれの石材で、接合するものが2点づつ(No. 2と6、3と11)存在する。鉄製品は、遺存度が悪いため、角釘状のもの(No.12・14・17・19)と比較的薄い板状のもの(No.13・15・16・18)とに大別される。他に、埋没土中より、土師器の小型甕(No.20)、須恵器の蓋(No.21)が出土している。

時期は、遺物から7世紀ごろと推定される。

第56号住居跡(第10図)

本住居跡は、調査区西端の中央付近のG-12グリッドに位置する。東壁を第60号住居跡、西半分を館堀跡、南半分を第61号住居跡によって切られているため、本住居跡の全容は不明である。遺存状態は、壁が北東の隅と北壁の一部しか残っておらず、床面も北東の隅から西と南に向かうL字形のわずかな部分が残っているのみであり、極めて悪い。

平面形は、遺存部分がわずかなため不明であるが、北東の隅と北壁から推測すると、方形か長方形もしくはそれに近似する四角形であったと考えられる。規模は、南北方向の最残存長が2.475m、東西方向の最残存長が2.42mである。



第10図 第56号住居跡

第56号住居跡土層説明

第1層:暗褐色土層(しまり粘性共にある。赤色粒子、炭化粒子を若干含む。若干の粘土風化した土を含む。)

第2層:暗褐色土層(しまり粘性共にある。粘土風化した土を多量に含む。)

住居跡の主軸方位は不明であるが、北壁がN-75.6°-Eの東西方向に近い方向を向いている。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、深さは北壁で遺構確認面から40cm確認できる。床面は、ほぼ平坦であるが、南西方向にやや傾斜しており、比高差は1～11cmとなっている。カマドは検出できなかったが、E地点の他の住居跡の傾向から、おそらく東壁に付設されているものと考えられる。ピットが北東の隅で検出されているが、層位的に床下に位置するため、柱穴ではないと考えられる。貯蔵穴と壁溝は検出されなかった。

出土遺物は、埋没土中から土師器の坏、甕、須恵器の甕、碗、蓋、縄文土器などが出土しているが、本住居跡に伴うと認定できる出土状態のものはなく、小型の破片ばかりであるため、掲載を見送った。

第60号住居跡、第61号住居跡、館堀跡に切られているため、これらの遺構よりも古い一方、床下から第62号住居跡の壁溝が検出されたため、第62号住居跡よりも新しいと考えられる。

第57号住居跡(第11・12・13図、図版2)

本住居跡は、調査区北西隅のI-12、J-12グリッドに位置する。カマド周辺を除く大半を館堀によって切られており、遺構の遺存状態は極めて悪い。第58号住居跡を切っている。

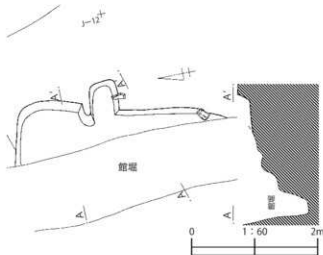
平面形は、大半を館堀に切られて不明であるが、遺存する北壁と東壁がほぼ直交するため、方形ないし長方形であったと推定される。規模は、南北方向の最残存長が3.39m、東西方向の最残存長が1.05mである。主軸方向は、N-101°-Eである。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは、20~26cmで、床面は西に向かって傾斜している。

カマドは、住居跡の東壁の北寄りで検出されたが、壁に対してほぼ直角に構築されている。壁を掘り込んで構築されたもので、燃焼部はほぼ住居跡の外に位置している。北側の袖がわずかに住居跡の内側に突出している。煙道部は、遺存していない。規模は、奥行き71cm、幅46cmである。焚き口の幅は、32cmである。カマドの主軸はN-101°-Eである。燃焼面は、床面より2cmほど低いが、焚き口近くが7cmほど深くなっている。

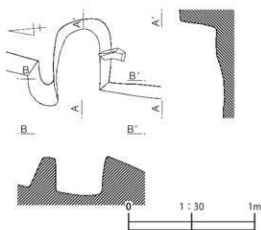
ピット、貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。

出土遺物は、少なく、埋没土中より、土師器の甕(No.1)が出土している。

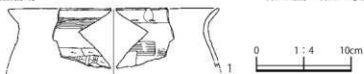
時期は、遺物から9世紀後半と推定される。



第11図 第57号住居跡



第12図 第57号住居跡カマド



第13図 第57号住居跡出土遺物

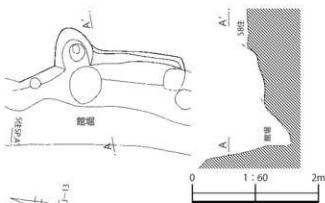
第3表 第57号住居跡出土遺物観察表

No.	種別 ①器種	②口径	③器高 ④残存高	⑤構成 ⑥成形	⑦外装色調 ⑧内装色調	⑨外周調整 ⑩内周調整	⑪色調(土質) 備考
1	土師器 甕	① (22.2)	③ (6.25)	⑤ 輪轉	⑦ 赤褐色 (Pue5YR 4/6) ⑧ 赤い赤褐色 (Pue5YR 5/4)	⑨ 口: 3コナテ、肩: 褐色ハク目輝ヘラナテ、肩: 赤・赤色ヘラケラテ。 ⑩ 口~肩: 3コナテ、肩: 褐色ハク目輝ヘラナテの赤ヘラナテ。	⑪ 赤い赤褐色 (Pue5YR 5/4)

第57B号住居跡(第14・15図)

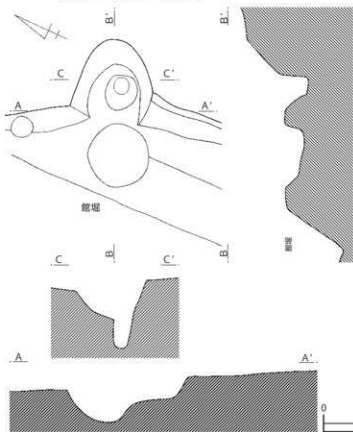
本住居跡は、調査区北西隅のI-12、J-12グリッドに位置する。第57号住居跡の床下において、ほぼ同じ位置で検出されたため、第57号住居跡の建て替え前の住居跡と判断した。第57号住居跡と同様に、カマド周辺を除く大半を館堀によって切られており、遺構の遺存状態は極めて悪い。第58号住居跡を切っている。

平面形は、大半を館堀に切られて不明であるが、唯一遺存する東壁が外側に弓なりに張る形状をしているため、ゆがんだ方形ないし長方形であったと推定される。規模は、南北方向の最残存長が2.60m、東西方向の最残存長が81cmである。主軸方向は、カマドのある東壁のゆがみがひどいため不明であるが、カマド以南の比較的真っ直ぐな部分を基準とすれば、 $N-88^{\circ}-E$ である。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは、15~29cmで、床面は西に向かって傾斜している。



第14図 第57B号住居跡

カマドは、住居跡の東壁で検出されたが、カマド以北の東壁の遺存度が悪いので、南北のどちらに寄っているかは不明である。壁を掘り込んで構築されたもので、燃焼部はほぼ住居跡の外に位置している。袖、煙道部は、遺存していない。規模は、奥行き68cm、幅65cmである。焚き口の幅は、49cmである。カマドの主軸は $N-65^{\circ}-E$ である。燃焼面は、床面とほぼ同じである。燃焼部の奥壁は、傾斜角 42.5° で立ち上がり、燃焼面の中央にビット状の深い穴が検出されている。



第15図 第57B号住居跡カマド

ビット、貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。

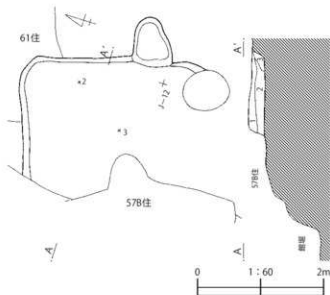
出土遺物は、極めて少ない。

時期は、第57号住居跡と同じく9世紀後半と推定される。

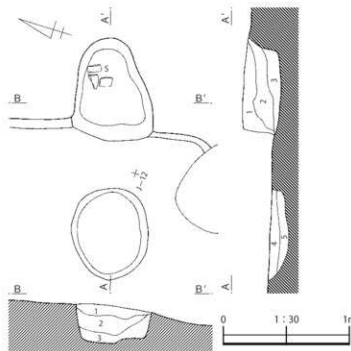
第58号住居跡(第16・17・18図、図版2)

本住居跡は、調査区北西隅のI-12、J-12グリッドに位置する。北東隅で第61号住居跡を切り、西側を第57、57B号住居跡と館堀に切られている。南壁は検出されなかった。

平面形は、遺存する北壁と東壁がほぼ直交するため、方形ないし長方形であったと推定される。規模は、南北方向の最残存長が2.959m、東西方向の最残存長が2.28mである。主軸方向は、N-73.5°-Eである。壁は、わずかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは、20~26cmで、床面は西に向かって傾斜している。



第16図 第58号住居跡



第17図 第58号住居跡カマド

カマドは、住居跡の東壁の南寄りで見出されたが、主軸がN-72°-Eであり、壁に対してほぼ直角に構築されている。壁を掘り込んで構築されたもので、燃焼部はほぼ住居跡の外に位置している。袖は遺存していない。煙道部は、明瞭な形で遺存していないが、燃焼部の奥壁の上半が51.5°で傾斜していることから、これが煙道の一部かもしれない。規模は、奥行き82cm、幅62cmである。焚き口の幅は、51cmである。燃焼面は、床面より5~7cmほど低い。

ビット、貯蔵穴、壁溝は検出されなかった。カマドの正面にて、楕円形の床下土坑が検出されている。

出土遺物は、少ないが、カマドより土師器の甕(No.1)、埋没土中より土師器の平底杯(No.2)、須恵器の高台杯(No.3)が出土している。

時期は、遺物から9世紀後半と推定される。

第58号住居跡土層説明

第1層:暗褐色土層(しまり、粘性共になし。Φ1mm以下の焼土粒子、粘土粒子を若干含む。)

第2層:暗褐色土層(第1層に似るが、粘土粒子の量がやや多い。)

第3層:黒褐色土層(しまり、粘性共になし。旧表黒土層風化土。壁崩壊土。)

第58号住居跡カマド土層説明

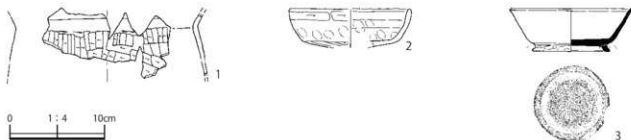
第1層:灰褐色土層(粘土風化土及び粘土ブロックを多く含む。炉天井崩壊土。)

第2層:赤褐色土層(粘土風化土。焼土ブロックを多く含む。炉天井崩壊土。)

第3層:暗褐色土層(粘土。焼土。炭化物粒を多く含む。)

第4層:灰褐色土層(焼土。粘土ブロックを非常に多く含む。)

第5層:黒褐色土層(地山の黒色土層風化土。)



第18図 第58号住居跡出土遺物

第4表 第58号住居跡出土遺物観察表

No.	種別	①口徑	②高さ	③底径	④底厚	⑤外表面色調	⑥内表面色調	⑦外面調整	⑧内面調整	⑨色調(粘土)
1	土師器	① 18.0	② (7.3)	③ 6.0	④ 0.8	⑤ 灰白赤褐色 (Hue2.5YR 4/4)	⑥ 灰白赤褐色 (Hue5YR 5/4)	⑦ 滑	⑧ 滑	⑨ 灰白赤褐色 (Hue5YR 5/4)
2	土師器	① 12.4	② (4.0)	③ 6.0	④ 0.8	⑤ 灰白赤褐色 (Hue5YR 5/3)	⑥ 灰白赤褐色 (Hue5YR 5/3)	⑦ 滑	⑧ 滑	⑨ 不明
3	須恵器	① 12.8	② 4.5	③ 6.0	④ 0.8	⑤ 黄灰色 (Hue2.5Y 5/1)	⑥ 黄灰色 (Hue2.5Y 5/1)	⑦ 滑	⑧ 滑	⑨ 黄灰色 (Hue2.5Y 6/1)

第59号住居跡(第19・20・21図、図版3)

本住居跡は、調査区西部のH-10、I-10グリッドに位置する。北側で、第8、9号住居跡と重複し、それらを切っている。南壁は、地形的に低くなっていることと、地山が風化した土壌であったために、検出できなかった。整理調査中に、対角線上に位置する柱穴が確認できたため、そこから、南壁の位置を復元した。この南壁を除けば、遺存状態は、比較的良好である。

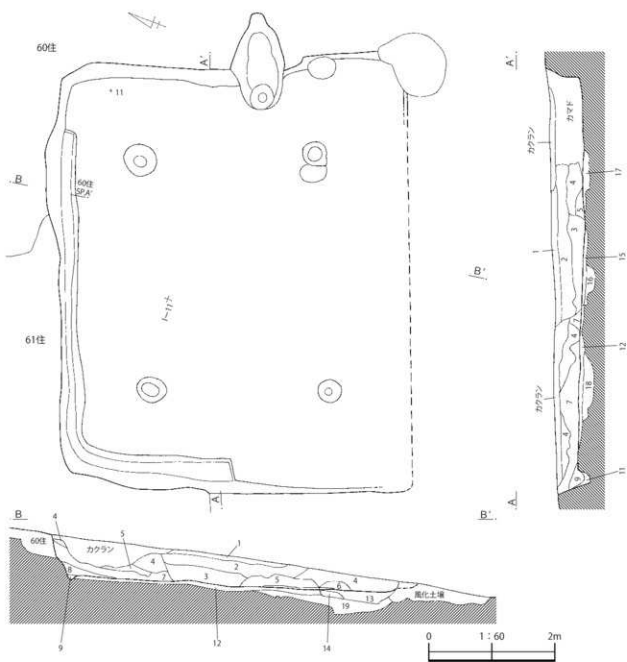
平面形は、東西方向が長い隅丸長方形である。規模は、東西方向が7.0m、南北方向が5.76mである。主軸方位はN-68°-Eである。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは、33~54cmで、床面は南に向かって傾斜している。

カマドは、住居跡の東壁の南寄りで検出されたが、主軸がN-62.5°-Eであり、壁に対してやや北向きに構築されている。壁を掘り込んで構築されたもので、燃焼部は壁にまたがる位置にある。袖はごくわずかに住居内に出っ張っているものの、壁とほとんど変わりが無い。カマドの規模は、全長1.68m、最大幅89cmを測る。燃焼部は、奥行き1.1m、最大幅88cmのひょうたん形を呈している。焚き口の幅は68cmで、焚き口付近には、床面よりも21cm低い、直径40cmほどの円形のピットが存在する。燃焼面は床面から深いところで10~13cmの深さであるが、奥壁付近では、むしろ床面よりも4cmほど高く、奥壁の高さは21cmである。煙道部は、幅23cm、長さ16cmで、燃焼部の奥壁の上半から、傾斜角30.5°で上り、二個体の土師器の甕が連結されて設置されていた。

柱穴は、直径20~25cmの円形のピットが、対角線上に四基検出された。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、北壁から西壁にかけて検出された。

出土遺物は、埋没土中より大量に出土している。カマドからは、燃焼部の埋没土中より土師器の甕(No.1・4)、小型甕(No.5)が、煙道の構築部材として使用された土師器の甕(No.2・3)が出土している。住居跡の北東隅の東壁付近から、土製紡錘車(No.11)が出土している。他に住居埋没土中より、土師器の平底杯(No.6・7・8)、須恵器の平底杯(No.9)、蓋(No.10)が出土している。

時期は、遺物から9世紀前半と推定される。

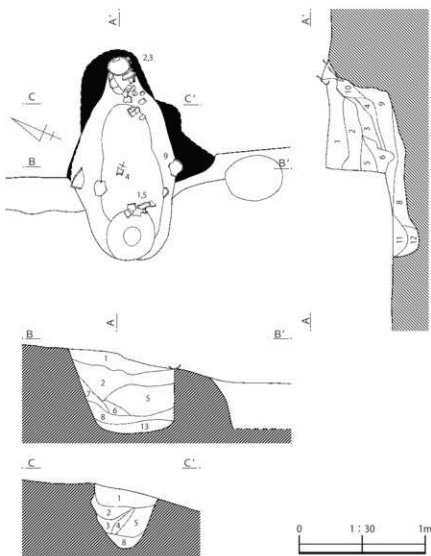


第19図 第59号住居跡

第59号住居跡土層説明

- 第1層:褐色土層(しまり,粘性共になし,ローム粒子を多く含む。)
- 第2層:暗褐色土層(しまり,粘性共になし,赤色,ローム粒子を若干含む。)
- 第3層:暗褐色土層(しまり,粘性共になし,白色テフラを若干含む。)
- 第4層:暗褐色土層(赤色,白色粒子を若干含む,しまりはあるが,粘性を欠く。)
- 第5層:暗褐色土層(赤色,白色粒子を比較的多く含む,しまりはあるが,粘性を欠く。)
- 第6層:灰褐色土層(しまり,粘性共になし,白色粘土を多量に含む。)
- 第7層:暗褐色土層(しまりはあるが,粘性を欠く,ロームブロックを比較的多く含む。)
- 第8層:褐色土層(しまりはあるが,粘性を欠く,赤色,白色,粘土,炭化粒子を多く含む。)
- 第9層:明灰褐色土層(硬の前填土である,白色粘土粒子を多く含む。)
- 第10層:黒色土層(しまり,粘性が共に強い,(ハリ床の一部と思われる))

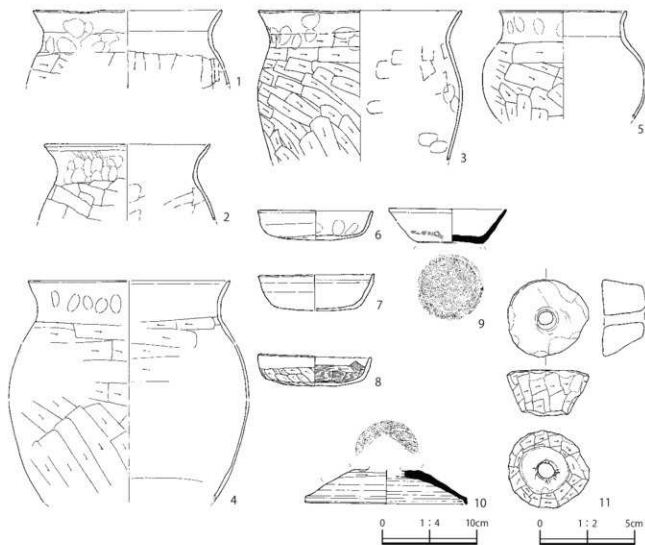
- 第11層:黒褐色土層(ロームブロックを多く含む。)
- 第12層:暗灰褐色土層(ローム、粘土ブロック、焼土ブロック等を多く含み、硬質である。)
- 第13層:暗褐色土層(しまり、粘性が共になし。ローム粒、炭化粒を比較的多く含む。)
- 第14層:暗褐色土層(しまり、粘性を欠く。ローム風化土を多く含む。)
- 第15層:暗灰褐色土層(粘土粒、焼土粒を多く含む。)
- 第16層:灰褐色土層(砂粒を非常に多く含む。)
- 第17層:黒褐色土層(焼土粒を比較的多く含む。)
- 第18層:黒褐色土層(ロームブロックを多く含む。)
- 第19層:暗褐色土層(ロームブロック、焼土ブロックを比較的多く含む。)



第20図 第59号住居跡カマド

第59号住居跡カマド土層説明

- 第1層:暗褐色土層(しまり、粘性共になし。φ3cm位の礫を若干含む。)
- 第2層:赤褐色土層(ローム、小礫、焼土を多く含む(カマド天井崩落 上))
- 第3層:暗褐色土層(焼土を非常に多く含む。(カマド天井崩落 上))
- 第4層:赤褐色土層(非常に良くしまっている。カマド天井焼面崩落上。)
- 第5層:暗灰褐色土層(小礫を多く含む。灰色粘土風化土層。)
- 第6層:暗灰褐色土層(第5層に似るが、小礫を含まない。焼土粒を多く含む。カマド壁崩落上。)
- 第7層:暗褐色土層(焼土、炭化物を多く含む。)
- 第8層:暗灰褐色土層(第7層によく似る。更に焼土、炭化物が多くなる。)
- 第9層:暗赤褐色土層(しまり、粘性なし。曜の灰色粘土、焼土を多く含む。)
- 第10層:暗赤褐色土層(焼土、炭化物を多く含む。)
- 第11層:暗褐色土層(粘土粒、焼土粒を多く含む。)
- 第12層:黒色土層(炭化物を非常に多く含む。粘質土。)
- 第13層:暗褐色土層(炭化物、焼土粒子を多く含む。)



第21図 第59号住居跡出土遺物

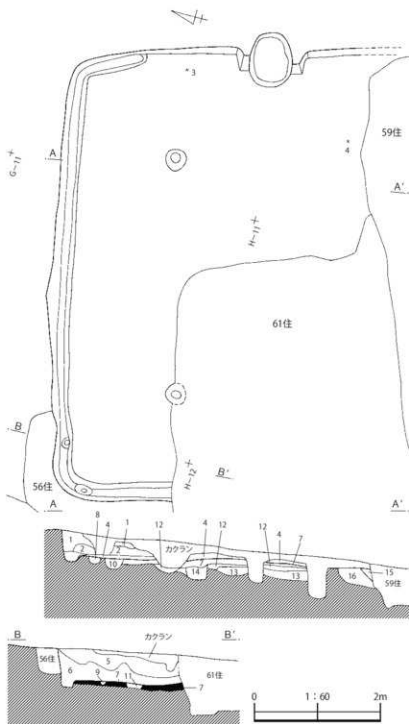
第5表 第59号住居跡出土遺物観察表

No.	種別 図番	①口径 ②底径	③高さ ④残存度	⑤構成 ⑥成形	⑦外面装飾 ⑧内面装飾	⑨外面図解 ⑩内面図解	⑪色相(粘土) 備考
1	土器類 壺	① 19.8 ② (7.8)	③ (7.8) ④ C→E 1/4	⑤ 酸化層 ⑥ 輪轆	⑦ 明赤褐色 (Hue10YR 7/6) ⑧ 褐色 (Hue7.5YR 6/6)	⑨ 口→脛: 指押さえのヨコナデ。肩・斜位へラケズリ。 ⑩ 口→脛: ヨコナデ。肩・斜位へラケズリ。	⑪ 褐色 (Hue7.5YR 6/6)
2	土器類 壺	① 17.2 ② -	③ (6.05) ④ C→E 1/3	⑤ 酸化層 ⑥ 輪轆	⑦ 明赤褐色 (Hue10YR 7/6) ⑧ 褐色 (Hue7.5YR 6/6)	⑨ 口→ヘラケズのヨコナデ。肩・指押さえのヨコナデ。肩・斜位へラケズリ。 ⑩ 口→脛: ヨコナデ。肩・斜位へラケズリ。	⑪ 褐色 (Hue7.5YR 6/6)
3	土器類 壺	① 21.4 ② -	③ (15.85) ④ C→E 1/2	⑤ 酸化層 ⑥ 輪轆	⑦ 明赤褐色 (Hue5YR 5/6) ⑧ 明赤褐色 (Hue5YR 5/6)	⑨ 口→脛: 指押さえのヨコナデ。脛→脛: 横位へラケズリ。肩・斜位へラケズリ。 ⑩ 口: ヨコナデ。肩・へラケズリ。脛→脛: 指押さえ。	⑪ 明赤褐色 (Hue5YR 5/6)
4	土器類 壺	① 21.2 ② -	③ (23.4) ④ C→E 1/4	⑤ 酸化層 ⑥ 輪轆	⑦ 明赤褐色 (Hue7.5YR 5/6) ⑧ 明赤褐色 (Hue5YR 5/6)	⑨ 口: 指押さえのヨコナデ。脛→脛: 横位へラケズリ。肩・斜位へラケズリ。 ⑩ 口→脛: ヨコナデ。肩・斜位へラケズリ。脛→脛: 横位へラケズリ。脛・斜位へラケズリ。	⑪ 明赤褐色 (Hue5YR 5/6)
5	土器類 壺	① 13.4 ② (11.4)	③ (11.4) ④ C→E 1/3	⑤ 酸化層 ⑥ 輪轆	⑦ 明赤褐色 (Hue5YR 5/6) ⑧ 明赤褐色 (Hue5YR 5/6)	⑨ 口→脛: ヨコナデ。肩・斜位へラケズリ。脛→脛: 横位へラケズリ。 ⑩ 口→脛: 指押さえのヨコナデ。脛→脛: 横位へラケズリ。脛・斜位へラケズリ。	⑪ ①に①の褐色 (Hue5YR 5/4)
6	土器類 鉢	① 12.0 ② 9.8	③ 10.5 ④ C→E 1/3	⑤ 酸化層 ⑥ 輪轆	⑦ 赤褐色 (Hue7.5YR 6/6) ⑧ 褐色 (Hue7.5YR 6/6)	⑨ 口→脛: ヨコナデ。脛→脛: 指押さえのヨコナデ。脛→脛: 横位へラケズリ。脛・斜位へラケズリ。	⑪ 褐色 (Hue7.5YR 6/6)
7	土器類 鉢	① 12.25 ② 8.4	③ 3.95 ④ C→E 4/5	⑤ 酸化層 ⑥ 輪轆	⑦ 赤褐色 (Hue7.5YR 7/6) ⑧ 褐色 (Hue7.5YR 6/6)	⑨ 口: ヨコナデ。脛→脛: 指押さえのヨコナデ。脛→脛: 横位へラケズリ。脛・斜位へラケズリ。	⑪ 褐色 (Hue7.5YR 6/6)
8	土器類 鉢	① 11.8 ② 11.7	③ 3.3 ④ C→E 1/1	⑤ 酸化層 ⑥ 輪轆	⑦ 赤褐色 (Hue5YR 7/6) ⑧ 赤褐色 (Hue5YR 6/6)	⑨ 口: ヨコナデ。脛→脛: 横位へラケズリ。 ⑩ 口: ヨコナデ。脛→脛: ハケ目。	⑪ 褐色 (Hue5YR 6/6)
9	土器類 鉢	① 12.4 ② 7.2	③ 3.6 ④ C→E 4/5	⑤ 還元層 ⑥ ロクロ	⑦ 黄灰色 (Hue2.5Y 6/1) ⑧ 赤褐色 (Hue2.5Y 6/1)	⑨ 口→脛: 水筒を絞ロクロナデ。脛底、ハケ目。脛: 回転糸切り(石)。 ⑩ 口→脛: 水筒を絞ロクロナデ。	⑪ 黄灰色 (Hue2.5Y 6/1) 黄褐色、カマノ上
10	土器類 鉢	① 天 6.8 ② 天 17.0	③ (3.5) ④ 天→E 2/3	⑤ 還元層 ⑥ ロクロ	⑦ 黄灰色 (Hue2.5Y 6/1) ⑧ 黄灰色 (Hue2.5Y 6/1)	⑨ ①: 回転糸切り(石)。脛: ロクロナデ。回転へラケズリ。脛: 横位へラケズリ。ロクロナデ。指押さえ。 ⑩ ①: 水筒を絞ロクロナデ。脛: ナデ(石)。	⑪ ①に①の褐色 (Hue7.5YR 5/4) 白色調不鮮
11	土製品 網罟	① 上 4.35 ② 下 2.65 ③ 孔上 0.7 ④ 下 1.1	③ 2.4 ④ ①	⑤ 酸化層 ⑥ -	⑦ 灰黄褐色 (Hue10YR 4/2) ⑧ -	⑨ ①: 横・斜位へラケズリ。上: ナデ。下: ナデ。 ⑩ ①: 水筒を絞ロクロナデ。脛: ナデ(石)。	⑪ ①に①の褐色 (Hue7.5YR 5/4) 明確な使用痕なし。

第60号住居跡 (第22・23・24・25図、図版4)

本住居跡は、調査区西部のG-11、H-11グリッドに位置する。西南部を第61号住居跡に、南部を第59号住居跡に切られている。第59・61号住居跡に切られている部分を除けば、遺存状態は、比較的良好である。

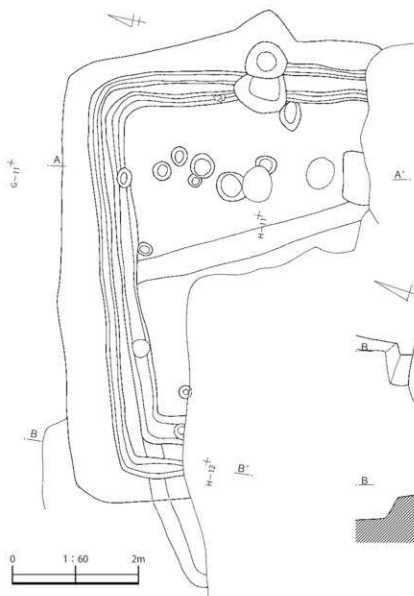
平面形は、東西方向が長い隅丸長方形である。規模は、東西方向が7.23m、南北方向が5.12mである。



第60号住居跡土層説明

- 第1層:暗褐色土層(しまり,粘性共になし,ローム粒子を少し含む。)
- 第2層:黄褐色土層(しまりが強い,ハードロームで固めてある。)
- 第3層:褐色土層(基盤であるロームと粘土層の風化土。)
- 第4層:灰褐色土層(灰色粘土風化土と焼土粒,炭化粒子を多く含む。)
- 第5層:明褐色土層(しまり,粘性若干ある,赤色粒子,炭化粒子を若干含む。)
- 第6層:暗褐色土層(しまり,粘性若干ある,黄色粒子,赤色粒子,炭化粒子とロームブロックを若干含む。)
- 第7層:暗灰褐色土層(粘土を多く含む,硬質である,貼り床。)
- 第8層:暗褐色土層(焼土粒子を多く含む。)
- 第9層:暗褐色土層(ロームブロックを多く含む。)
- 第10層:暗褐色土層(粘土ブロックを多く含む。)
- 第11層:暗褐色土層(ロームブロック,焼土粒子を多く含む。)
- 第12層:暗灰褐色土層(粘土ブロックを多く含む,硬質である。)
- 第13層:暗褐色土層(粘土ブロック,粒子を多く含む,貼り床。)
- 第14層:暗褐色土層(ローム,粘土粒子を多く含む。)
- 第15層:暗褐色土層(しまり,粘性共になし,焼土,炭化粒子を多く含む。)
- 第16層:暗黄褐色土層(ローム風化土,焼土粒子を多く含む。)

第22図 第60号住居跡



第23図 第60号住居跡掘り方

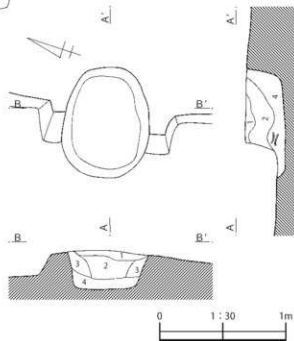
第60号住居跡カマド土層説明

第1層:暗灰褐色土層(しまりを欠くが、粘性はある。灰色粘土風化土。)

第2層:暗灰褐色土層(第1層に似るが、1層よりしまっており、灰色粘土風化土(若干の焼土を含む)を非常に多く含む。カマド天井崩壊土。)

第3層:赤灰褐色土層(非常に多くの焼土粒、ブロックを含む。)

第4層:暗赤灰褐色土層(炭化粒、焼土粒を多く含む。)



第24図 第60号住居跡カマド

主軸方位は $N-75.5^{\circ}-E$ である。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは、 $10\sim 40\text{cm}$ で、床面は南に向かって傾斜している。

カマドは、住居跡の東壁のほぼ中央で検出されたが、主軸が $N-76^{\circ}-E$ であり、壁に対してほぼ直角に構築されている。壁を掘り込んで構築されたもので、燃烧部は壁にまたがる位置にある。袖が短く住居内に出っ張っている。煙道部は、遺存しておらず、燃烧部だけの遺存である。燃烧部は、奥行き 87cm 、最大幅 68cm 、焚き口の幅 58cm の楕円形を呈している。燃烧面は、床面より $3\sim 7\text{cm}$ ほど低い。焚き口付近のビット状の小穴は検出されなかった。

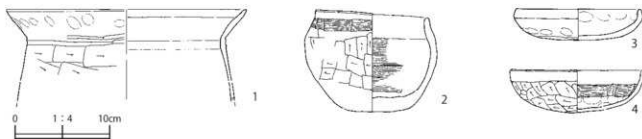
柱穴は、直径 30cm の円形のビットが、対角線上に2基検出された。貯蔵穴は、検出されなかった。壁溝は、北東隅から西壁にかけて検出された。

掘り方において、入れ子状に重なる2条の壁溝と、本住居跡とは位置が異なる壁溝が1条検出され

た。前者は、本住居跡の範囲内に取まることから本住居跡の建て替え前の古い住居跡と判断した。カマドと推定される穴の切り合い関係から、本住居跡は、最も小さい範囲のものが最も古く、二度に渡って拡張されたものと判断された。後者は、本住居跡の範囲外に壁溝がめぐることから、別の住居と判断し、第62号住居跡とした。

出土遺物は、埋没土中より大量に出土している。住居埋没土中より、土師器の甕 (No. 1)、鉢 (No. 2)、丸底坏 (No. 3・4) が出土している。

時期は、遺物から8世紀後半ごろと推定される。



第25図 第60号住居跡出土遺物

第6表 第60号住居跡出土遺物観察表

No.	種別	口径	口径高	口径底	口径底	口径底	口径底	口径底	口径底	口径底
1	土師器	口径	口径高	口径底	口径底	口径底	口径底	口径底	口径底	口径底
2	土師器	口径	口径高	口径底	口径底	口径底	口径底	口径底	口径底	口径底
3	土師器	口径	口径高	口径底	口径底	口径底	口径底	口径底	口径底	口径底
4	土師器	口径	口径高	口径底	口径底	口径底	口径底	口径底	口径底	口径底

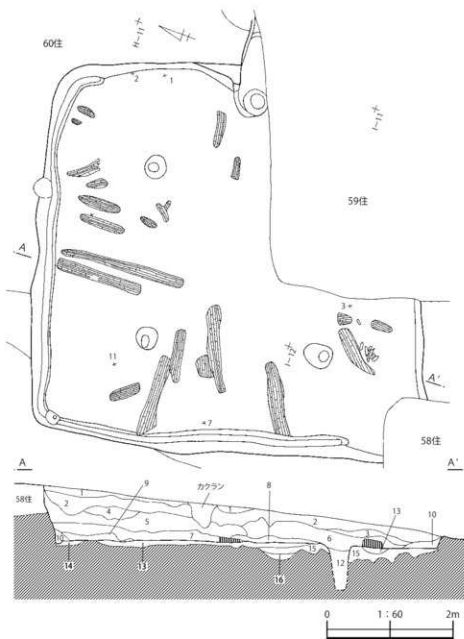
第61号住居跡 (第26・27・28図、図版5)

本住居跡は、調査区西部のH-11グリッドに位置する。南東部を第59号住居跡に、南西隅を第58号住居跡に、北西隅を館跡跡地に切られている。東部で第8号住居と、北西隅で第3号住居と重複し、それらを切っている。第59号住居跡に切られている部分を除けば、遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、規模が東西方向6.33m、南北方向6.35mで、南北方向が長い隅丸長方形である。主軸方位はN-70.5°-Eである。壁は、緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは、最大で80cmである。床面は比較的平坦で、中央の広い範囲で粘土質の非常に硬化した貼り床が認められた。

カマドは、住居跡の東壁のほぼ中央で検出されたが、主軸がN-73°-Eであり、壁に対してほぼ直角に構築されている。壁を掘り込んで構築されたもので、燃焼部は壁にまたがる位置にある。袖が短く住居内に出っ張っている。煙道部は、燃焼部との境界が明瞭でなく、燃焼部の奥壁が傾斜角20°で上り、煙道部の奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。燃焼部は、奥行き1.08m、最大幅56cmの楕円形を呈している。焚き口の幅は40cmで、焚き口付近には、床面よりも21cm低い、直径40cmほどの円形のピットが存在する。燃焼面は、床面より9cmほど低い。

柱穴は、直径20cmの楕円形のピットが、対角線上に3基検出された。貯蔵穴は、検出されなかった。



第26図 第61号住居跡

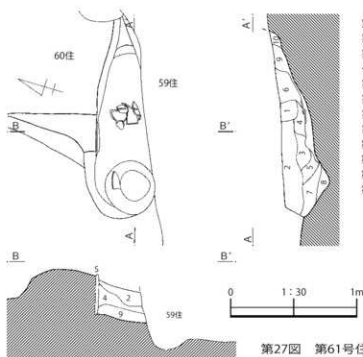
第61号住居跡土層説明

- 第1層:黒褐色土層(しまり,粘性共になし,旧表黒色土風化上.)
- 第2層:黒褐色土層(第1層に似るが,ローム質暗黄褐色土を斑状に多く含む.)
- 第3層:暗褐色土層(しまり,粘性共になし,Φ5~10mmのローム粒を多く含む.)
- 第4層:暗褐色土層(しまり,粘性共になし,Φ0.5~2mmの焼土粒子と粘土粒子を若干含む.)
- 第5層:暗褐色土層(しまり,粘性共になし,Φ1~3mmのローム粒子,焼土粒子を若干含む.)
- 第6層:暗褐色土層(第5層に似るが各々の粒子の含有量が多い.)
- 第7層:黒褐色土層(炭化物,焼土粒子を非常に多く含む.)
- 第8層:黒褐色土層(炭化木材の風化土と思われ,炭化物塊を非常に多く含む.)
- 第9層:黒褐色土層(炭化粒,焼土粒子,壁の風化土との粘土粒子を比較的多く含む.)
- 第10層:暗灰褐色土層(壁の崩壊土層(灰色粘土).)
- 第11層:黒褐色土層(壁の崩壊土層(旧表黒色土).)
- 第12層:暗褐色土層(ロームブロックを非常に多く含む.)
- 第13層:暗褐色土層(灰,ロームブロック,粘土ブロックを多く含む,非常に硬質である.)
- 第14層:暗灰褐色土層(粘土粒子を多く含む.)
- 第15層:暗褐色土層(ロームブロックを多く含む.)
- 第16層:暗褐色土層(ローム粒子を多く含む.)

壁溝は、北東隅から西壁にかけて検出された。

床面において、炭化した木材が放射状に出土しており、いわゆる焼失住居である。出土遺物は、埋没土中より大量に出土している。住居埋没土中より、土師器の甕 (No. 1~3)、平底杯 (No. 4~6)、須恵器の高台杯 (No. 7)、平底杯 (No. 8~10)、白玉 (No.11) が出土している。No. 6 と 8 は、底部に記号のような墨書が書かれている。

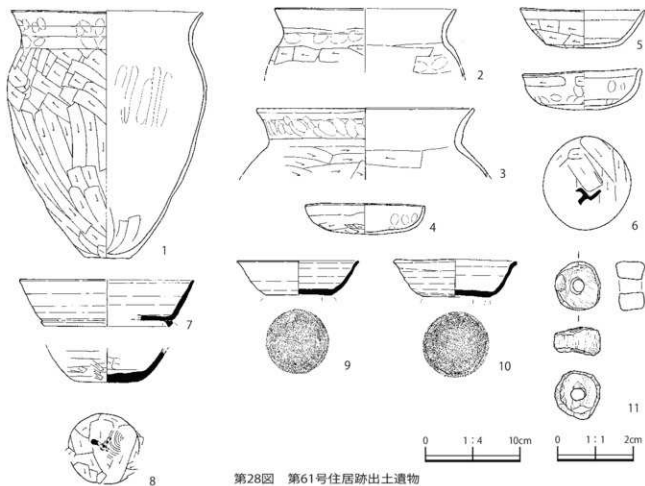
時期は、遺物から9世紀前半ごろと推定される。



第61号住居跡カマド土層説明

- 第1層:暗褐色土層(非常によくしまっている,白色粒子を若干含む。)
- 第2層:暗褐色土層(非常によくしまっている,白色,炭化,焼土粒子をやや多く含む。)
- 第3層:暗褐色土層(良くしまっている,焼土粒子を若干含む。)
- 第4層:赤褐色土層(炭化粒,焼土ブロックを多く含む。)
- 第5層:暗褐色土層(第3層に似るが焼土粒子が多い。)
- 第6層:赤褐色土層(焼土ブロック,炭化,焼土粒を非常に多く含む。)
- 第7層:暗褐色土層(炭化粒,粒子を非常に多く含む。)
- 第8層:暗褐色土層(炭化粒,焼土粒を若干含む。)
- 第9層:赤褐色土層(焼土ブロックを多く含む。)
- 第10層:黄褐色土層(壁のローム崩壊上。)

第27図 第61号住居跡カマド



第28図 第61号住居跡出土遺物

第7表 第61号住居跡出土遺物観察表

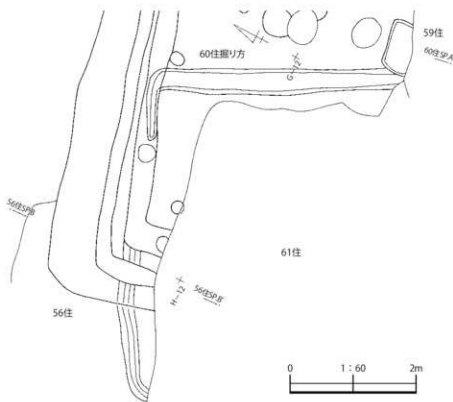
No.	種別 数量	①口徑 ②底径	③高さ ④残存度	⑤構成 ⑥成形	⑦外面調査 ⑧内面調査	⑨色調(粘土) 備考
1	土師器 1	① 20.15 ② -	③ 26.15 ④ -	⑤ 焼成 ⑥ 成形	⑦ 明褐色 (Hue25Y 7/6) ⑧ 明褐色 (Hue7.5YR 7/6)	⑨ 色調不明
2	土師器 1	① 19.0 ② -	③ 45.0 ④ 口-底 1/2	⑤ 焼成 ⑥ 成形	⑦ 赤褐色 (Hue5YR 4/6) ⑧ 赤褐色 (Hue5YR 4/6)	⑨ 赤褐色 (Hue5YR 4/6)
3	土師器 1	① 22.6 ② -	③ 7.0 ④ 口-底 1/2	⑤ 焼成 ⑥ 成形	⑦ 赤褐色 (Hue5YR 5/4) ⑧ 赤褐色 (Hue5YR 5/4)	⑨ 赤褐色 (Hue5YR 5/4)
4	土師器 1	① 12.5 ② -	③ 3.2 ④ 口-底 3/4	⑤ 焼成 ⑥ 成形	⑦ 赤褐色 (Hue7.5YR 5/4) ⑧ 赤褐色 (Hue7.5YR 5/4)	⑨ 赤褐色 (Hue7.5YR 5/4)
5	土師器 1	① 13.3 ② 2.7	③ 4.2 ④ 口-底 4/5	⑤ 焼成 ⑥ 成形	⑦ 明褐色 (Hue7.5YR 5/6) ⑧ 褐色 (Hue7.5YR 6/0)	⑨ 褐色 (Hue7.5YR 6/0)
6	土師器 1	① 12.45 ② -	③ 4.1 ④ 口-底 1/1	⑤ 焼成 ⑥ 成形	⑦ 赤褐色 (Hue7.5YR 5/4) ⑧ 赤褐色 (Hue7.5YR 5/4)	⑨ 赤褐色 (Hue7.5YR 5/4) 外面底部に黒色、部分的に濃褐色のため、記号が文字が不明。
7	須恵器 1	① 18.3 ② -	③ 4.95 ④ 口-底 1/4	⑤ 漣片施 ⑥ 口口口	⑦ 褐色 (HueN 5/3) ⑧ 褐色 (HueN 5/3)	⑨ 褐色 (HueN 5/3)
8	須恵器 1	① 13.1 ② -	③ 7.7 ④ 口-底 2/3	⑤ 漣片施 ⑥ 口口口	⑦ 赤褐色 (Hue2.5Y 8/1) ⑧ 赤褐色 (Hue5Y 8/2)	⑨ 赤褐色 (Hue2.5Y 8/1) 外面底部に黒色、部分的に濃褐色のため、記号が文字が不明。
9	須恵器 1	① 12.85 ② -	③ 3.6 ④ 口-底 3/4	⑤ 漣片施 ⑥ 口口口	⑦ 赤褐色 (HueN 5/3) ⑧ 赤褐色 (HueN 5/3)	⑨ 赤褐色 (HueN 5/3)
10	須恵器 1	① 7.0 ② -	③ 4.0 ④ 口-底 9/10	⑤ 漣片施 ⑥ 口口口	⑦ 赤褐色 (HueN 5/3) ⑧ 赤褐色 (HueN 5/3)	⑨ 赤褐色 (HueN 5/3)
11	埴石製品 1	① 12 ② 丸 0.4	③ 6.8 ④ 丸 1/1	⑤ - ⑥ -	⑦ 緑灰色 (Hue5G 5/1) ⑧ -	⑨ -

第29号住居跡(第29図、図版4)

本住居跡は、調査区西部のH-11グリッドに位置する。掘り方みの遺存で、遺存度はすこぶる悪い。第60号住居跡の最古の壁溝に切られ、第56号住居跡の床下に位置する。主軸は、N-63°-Eである。規模は、東西方向が5.32m、南北方向の残存長が4.6mである。カマドと推定される掘り込みが東辺の残存する南端で検出されたことから、平面形は、南北方向に長い隅丸長方形であると推定される。

出土遺物は、第60号住居跡および第56号住居跡との分別ができなかったため、不明である。

時期は、不明である。



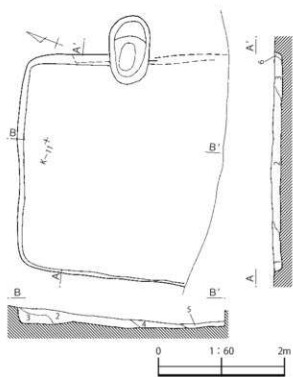
第29図 第60号住居跡掘り方

第63号住居跡(第30・31・32図、図版5、6)

本住居跡は、調査区南西部のJ-11、K-11グリッドに位置する。南部は調査区外のため、未調査である。東壁のカマド以南を攪乱に切られている。南半分を除けば、遺存状態は、比較的良好である。

平面形は、規模が東西方向3.38m、南北方向3.32mであるが、南壁が検出されていないことを考慮すれば、南北方向に長い隅丸長方形である。主軸方位はN-71.5°-Eである。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは、6~8cmである。床面は比較的平坦である。

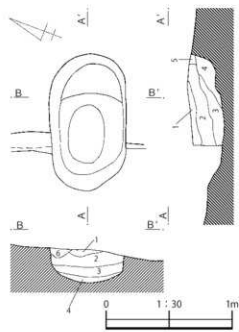
カマドは、住居跡の東壁のほぼ中央で検出されたが、主軸がN-70°-Eであり、壁に対してほぼ直角に構築されている。壁を掘り込んで構築されたもので、燃焼部は壁にまたがる位置にある。袖はごくわずかに住居内に出っ張っているものの、壁とほとんど変わりがない。煙道部は、明瞭な形で遺存していないが、燃焼部の奥に比高差5cmの段差があり、これが煙道の一部かもしれない。燃焼部は、奥行き77cm、幅61cmの楕円形を呈している。焚き口の幅は、58cmである。燃焼面は、床面より11~13cmほど低い。焚き口付近のピット状の小穴は検出されなかった。柱穴、貯蔵穴、壁溝は検



第30図 第63号住居跡

第63号住居跡土層説明

- 第1層: 暗褐色土層(しまっているが粘性を欠く、白色バミスを若干含む。)
- 第2層: 暗褐色土層(第1層に似るが、ロームブロックを若干含む。)
- 第3層: 暗褐色土層(しまり、粘性共に有る。粘土ブロックをやや多く含む。)
- 第4層: 暗褐色土層(しまり、粘性共に欠く。Φ1mm以下の黄色粒子を含む。)
- 第5層: 暗褐色土層(しまり、粘性共に欠く。赤色粒子を若干含む。)
- 第6層: 明灰色粘土層(しまり、粘性共に有る。漆喰?)



第31図 第63号住居跡カマド

第63号住居跡カマド土層説明

- 第1層: 赤褐色土層(粘土の塊けた部分であり、カマドの天井部分と思われる。)
- 第2層: 暗赤褐色土層(焼土ブロック、焼土粒、炭化物粒を多量に含む。しまり、粘性共にない。)
- 第3層: 暗赤褐色土層(組成は2層に類似するが、焼土の含有量がより少ない。)
- 第4層: 黒褐色土層(炭化物粒、灰分を多量に、焼土粒を均一に含む。しまり、粘性共にない。)
- 第5層: 明黒褐色土層(焼土粒、炭化物粒を少量含む。しまりはあるが、粘性は高い。)
- 第6層: 黒褐色土層(焼土粒、焼土ブロック、炭化物粒を多量に含む。しまりはあるが、粘性はない。)

出されなかった。

出土遺物は、出土遺物は、少なく、埋没土中より、土師器の小型甕 (No. 1)、平底杯 (No. 2) が出土している。

時期は、遺物から9世紀前半と推定される。



第32図 第63号住居跡出土遺物

第8表 第63号住居跡出土遺物観察表

No.	種別	①口径	②器高	③構成	④外面色調	⑤外面装飾	⑥色調(粘土)
1	土師器 小甕	① 14.6 ② -	③ 5.7 ④ 口径-器 1/8	⑤ 成 ⑥ 成 ⑦ 酸化層 ⑧ 輪	⑨ 灰褐色 (Hue5YR 4/2) ⑩ 灰褐色 (Hue5YR 4/2)	⑪ 口: ココナデ。肩: 縦位ヘラズリのちココナデ。 ⑫ 口: ココナデ。肩: ココナデのち縦線によるナデ溝。肩-縁合境で下方へナデ溝のち縦位ヘラナデ。	⑬ 灰褐色 (Hue5YR 4/2)
2	土師器 杯	① 10.8 ② 10.0	③ 3.5 ④ 口径-器 1/4	⑤ 酸化層 ⑥ 輪	⑦ 灰-白褐色 (Hue7.5YR 6/6) ⑧ 灰-白褐色 (Hue7.5YR 6/6)	⑨ 口: ココナデ。肩-縁: ヘラズリ。 ⑩ 口: ココナデ。肩-縁: ヘラナデ。	⑬ 色調不明

第2節 掘立柱建物跡

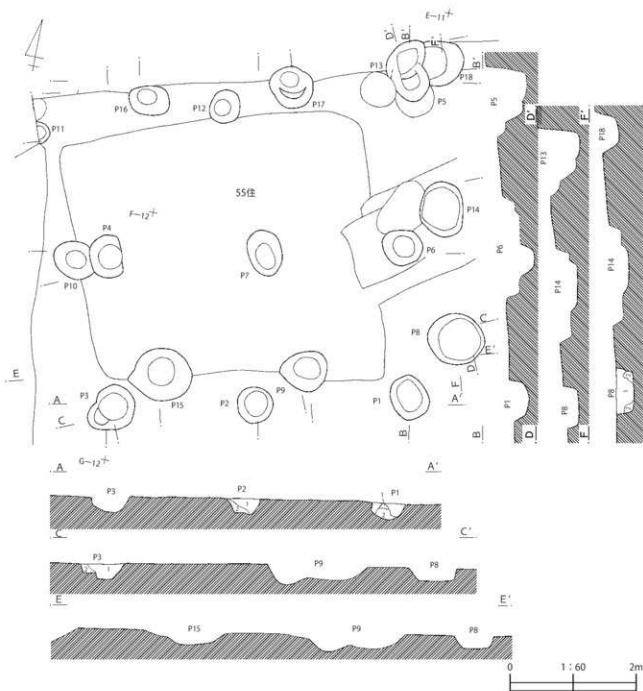
E地点では4棟を掘立柱建物跡と認定した。このうち、調査時において確認されたのは第1号掘立柱建物跡であるが、整理調査中の検討により、一部の柱穴を共有する3棟に分かれることが判明した。また、第2号掘立柱建物跡は、整理調査中の検討によって新たに認定したものである。調査区域内では他にも柱穴状のピットが多数検出されており、中でも東部のピット群は、掘立柱建物跡を構成していると思われるが、1間の距離に規格性が認められなかったため、掘立柱建物跡と認定するに至らなかった。ここでは第1号～第2号掘立柱建物跡の4棟について説明する。

E地点第1号掘立柱建物跡 (第33・34・35図、図版6)

本建物跡は、調査区北西隅のE-11、F-11グリッドに位置する。3棟から成るが、一部の柱穴を共有していることから、一つの掘立柱建物の建て替えと判断した。新しいものからそれぞれ、第1A号、第1B号、第1C号掘立柱建物跡とした。第55号住居跡のS P. A-A'にてP4、P10が、S P. B-B'にてP7が第55号住居跡に切られている(第7図)。第55号住居跡と同様に、重機による掘削によって切られたP6、P14を除き、遺構の遺存状態は比較的良好である。

第1A号掘立柱建物跡 北西の隅と北辺中央の柱穴が調査区外にはずれるが、東西方向2間、南北方向2間で、中央に柱穴を有する総柱建物であると考えられる。規模は、東西方向が4.80m、南北方向が5.10mで、1間の長さも、東西方向が2.40m、南北方向が2.55mと南北方向がわずかに長いものの、ほぼ方形に近い。主軸(東西軸)方位は、N-79°-Eをとる。柱穴は、ほぼ直線上に並び、平面形が直径60cm～70cmの円形～楕円形を呈し、確認面からの深さも概ね16～34cmの間に収まる。第1B号掘立柱建物跡とP3、P7を共有する。出土遺物がないため、本建物跡の時期を特定することは困難ではあるが、P4、P7が7世紀ごろと推定される第55号住居跡に切られていることから、第55号住居跡よりも古いと考えられる。

第1B号掘立柱建物跡 北西の隅の柱穴の西半分が調査区外にはずれるが、東西方向2間、南北方



第33図 E地点第1号掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡P1土層説明

- 第1層:明茶褐色土層(しまり、粘性を欠く、ローム風化土を多く含む。)
- 第2層:暗茶褐色土層(しまりは有るが、粘性を欠く、炭化粒子を若干含む。)

第1号掘立柱建物跡P2土層説明

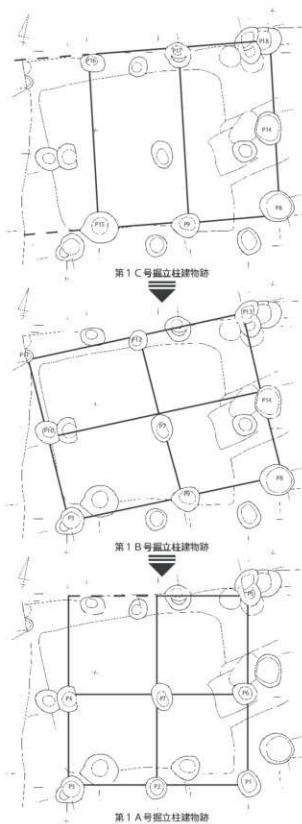
- 第1層:暗褐色土層(しまりはあるが、粘性を欠く。)
- 第2層:茶褐色土層(しまり、粘性共にある。炭化粒子を若干含む。)
- 第3層:明茶褐色土層(しまり、粘性共に強い、粘土風化土を多量に含む。)

第1号掘立柱建物跡P3土層説明

- 第1層:暗褐色土層(しまりはあるが、粘土を欠く、Φ1cm位のロームブロックを若干含む。)
- 第2層:明茶褐色土層(しまり、粘性共にある、粘土、ローム風化土を多量に含む。)

第1号掘立柱建物跡P8土層説明

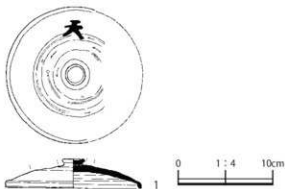
- 第1層:茶褐色土層(しまり、粘性共に有り、炭化粒子、ロームブロックを多量に含む。)
- 第2層:暗褐色土層(しまり、粘性共に有り、炭化粒子を若干含む粘質土。)



第34図 E地点第1号掘立柱建物跡変遷

向2間で、中央に柱穴を有する。第1A号掘立柱建物跡と同様に、総柱建物であると考えられる。規模は、東西方向が5.70 m、南北方向が4.50 mで、1間の長さも東西方向が2.85 m、南北方向が2.25 mと東西方向が長い長方形である。主軸（東西軸）方位は、 $N-65^{\circ}-E$ をとる。柱穴は、南北方向がほぼ直線上に並ぶが、東西方向は西辺の柱穴列が一樣に北にずれている。平面形が主として直径70cm～90cmの円形～楕円形を呈し、確認面からの深さも概ね14～31cmの間に収まる。第1A号掘立柱建物跡とP3、P7を共有し、第1C号掘立柱建物跡とP8、P9、P14を共有する。P7、P10が7世紀ごろと推定される第55号住居跡に切られており、P10が第1A号掘立柱建物跡のP4に切られていることから、第55号住居跡および第1A号掘立柱建物跡よりも古いと考えられる。また、第1A号および第1C号掘立柱建物跡とそれぞれ柱穴を共有しているが、第1A号掘立柱建物跡と総柱建物という建物の構造が同じであるのに対し、第1C号掘立柱建物跡とは構造が異なるものの、東西方向が長いという系譜的な連なりが認められることから、第1C号掘立柱建物跡よりも新しいと推定した。なお、P13より、かえりの無い須恵器の蓋（第35図）が出土しているが、層位的に新しいと考えられる第55号住居跡の出土遺物よりも新しく、層序上の知見と矛盾する。出土状態も遺構埋没土出土ということ以上の情報が無いため、後世の混入かもしれない。

第1C号掘立柱建物跡 北西の隅の柱穴の西半分が調査区外にはずれるが、館廬に切られているため、東西方向の間数は不明である。遺存する西辺が東辺と異なり中央に柱穴をもたないことから、少なくとも3間（4.80 m）以上と推定される。南北方向は2間（4.50 m）である。1間の長さは、東西方向が2.40 m、南北方向が2.25 mである。主軸（東西軸）方位は、 $N-75.5^{\circ}-E$ をとる。柱穴は、南北方向がほぼ直線上に並ぶが、東西方向は東辺の柱穴列が



第35図 E地点第1号掘立柱建物出土遺物

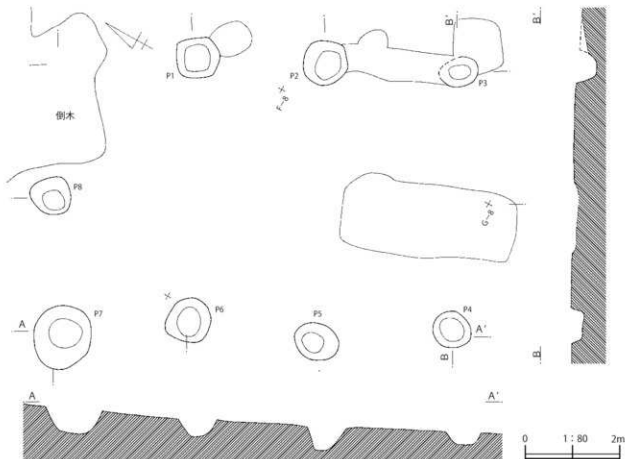
一様に北にずれている。平面形が主として直径70cm～90cmの円形～楕円形を呈し、確認面からの深さも概ね11～20cmの間に収まる。第1B号掘立柱建物跡とP8、P9、P14を共有する。出土遺物がいないため、本建物跡の時期を特定することは困難ではあるが、第1B号掘立柱建物跡と共有する柱穴をもち、第1A号、第1B号掘立柱建物跡と建物の構造が異なることから、第1B号掘立柱建物跡よりも古いと考えられる。

第9表 E1地点第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表

No.	種別 数量	①口径 ②長さ	③断面 ④埋存層	⑤構成 ⑥形状	⑦外面色調 ⑧内面色調	⑨外面調物 ⑩内面調物	⑪色調(粘土) 備考
1	遺物 遺	①径 2.3 ②長 14.25	③3.05 ④天～基 1/2	⑤通気筒 ⑥ロクロ	⑦灰白色 (Pue5Y 7/1) ⑧灰白色 (Pue5Y 7/1)	⑨天→筒・回転ヘラナデ、基：ロクロナデ(筒) ⑩天→筒・回転ヘラナデ、基：ロクロナデ(筒)	⑪灰白色 (Pue5Y 7/1) 外面天井部に黒色「天」、陶器破片を多量。

E地点第2号掘立柱建物跡(第36図、図版6)

本建物跡は、調査区中央西寄りのE-2、F-8グリッドに位置する。北東の隅を倒木に、南辺の



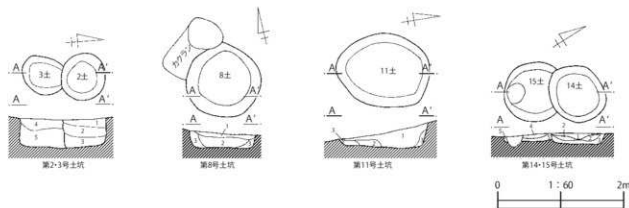
第36図 E地点第2号掘立柱建物跡

中央を攪乱土坑に切られており、未確認ではあるが、東西方向2間、南北方向3間の構造と考えられる。遺構の遺存状態は比較的良好である。規模は、東西方向が4.50m、南北方向が6.75mである。1間の長さは、いずれも2.25mである。主軸（南北軸）方位は、N-28°-Wをとる。柱穴は、ほぼ直線上に並ぶが、P6が東にずれている。平面形は、P7を除き、主として直径60cm～70cmの円形～楕円形を呈し、確認面からの深さも概ね14～30cmの間に収まる。出土遺物がなく、時期の判明している遺構との切り合い関係もないことから、本建物跡の時期は特定できなかった。

第3節 土坑・ピット（第37・38図、図版6・7）

E地点では数十基の土坑と百数十基のピットが検出されている。その全てを報告することは不可能であるため、ここではその一部を報告する。

第2号土坑 調査区の東部のD-1グリッドに位置する。第3号土坑と重複し、それを切っている。平面形は北西方向がわずかに広い円形を呈し、規模は、北西～南東方向が73cm以外は、70cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最高で46cmである。底面は広く平坦である。遺物は、埋没土中より、土師器杯の小片が出土しているのみである。



第37図 E地点土坑(1)

第2、3号土坑土層説明

- 第1層:茶褐色土層(ローム微粒,炭化物粒,火山灰を少量含む,しまり,粘性共にない)
- 第2層:明茶褐色土層(組成は1層に類似する,色調が相当に明るい)
- 第3層:明黒褐色土層(炭化物粒,火山灰粒を微量に含み,ローム小ブロックをまれに混入する,しまりなく,粘性を有するが弱い)
- 第4層:黒褐色土層(ローム粒を少量含み,ローム風化土を斑点状に多量に混入する,しまりはあるが,粘性はない)
- 第5層:明黒褐色土層(ローム粒,白色粒子,炭化物粒を少量含み,ローム風化土を少量混入する,しまりはあるが,粘性はない)

第8号土坑土層説明

- 第1層:明黒褐色土層(白色粒子,炭化物粒を多量に含み,ローム風化土を混入する,しまりはあるが粘性は弱い)
- 第2層:明黒褐色土層(1層に類似するが,ローム風化土の混入が少ない)
- 第3層:茶褐色土層(ローム粒,炭化物粒を少量含み,ローム風化土を多量に含む,しまりはあるが粘性はない)

第11号土坑土層説明

- 第1層:黒褐色土層(ローム粒,白色粒子を微量含む,しまり,粘性共に弱い)
- 第2層:明黒褐色土層(ローム微粒を少量含む,しまりはあるが粘性は弱い)
- 第3層:暗茶褐色土層(ローム粒,炭化物粒を含み,ローム風化土を混入する,しまりはあるが粘性はない)

第14、15号土坑土層説明

- 第1層:黒褐色土層(炭化物粒を微量含み,茶褐色土を少量混入する,しまりはあるが粘性はない)
- 第2層:明黒褐色土層(ローム微粒,火山灰を微量含み,暗褐色土を斑点状に混入する,しまりはあるが粘性はない)
- 第3層:暗茶褐色土層(火山灰を少量含み,ローム風化土を斑点状に混入する,しまり,粘性共に有するが弱い)
- 第4層:黒褐色土層(ローム微粒を微量含み,茶褐色土を斑点状に混入する,しまりはあるが粘性はない)
- 第5層:明黒褐色土層(火山灰,炭化物粒を微量含む,しまりはあるが粘性はない)

第3号土坑 調査区の東部のD-1グリッドに位置する。第2号土坑と重複し、それに切られている。平面形は北東～南西方向に広い楕円形を呈し、規模は北東～南西方向が残存長72cm、北西～南東方向が60cmである。壁はセクション図上ではややオーバーハンギングみに立ち上がり、確認面からの深さは最高で49cmである。底面は広く比較的平坦である。遺物は、埋没土中より、土師器甕、杯、須恵器の甕、碗、盤、縄文土器の破片が出土している。

第8号土坑 調査区の東部のD-1グリッドに位置する。北西で土坑、ピットと重複し、土坑を切るが、ピットに切られている。平面形は直径1.18mの円形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最高で26cmである。底面は広く平坦である。遺物は、埋没土中より、土師器杯の小片と緑泥片岩の凹み石が出土している。

第11号土坑 調査区の東部のE-1グリッドに位置する。どの遺構とも重複せずに単独で検出された。平面形は南北方向に広い楕円形を呈し、規模は南北方向が1.48m、東西方向が1.17mである。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で38cmである。底面は広く平坦である。遺物は、埋没土中より、須恵器碗の底部片が出土している。

第14号土坑 調査区の東部のD-2グリッドに位置する。第15号土坑と重複し、それを切っている。平面形は北東～南西方向に広い楕円形を呈し、規模は北東～南西方向が96cm、北西～南東方向が81cmである。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で17cmである。底面は広く平坦である。遺物は何も出土しなかった。

第15号土坑 調査区の東部のD-2グリッドに位置する。第14号土坑と小ピットと重複し、それらに切られている。平面形は直径93cmの円形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最高で5cmである。底面は広く平坦である。遺物は、埋没土中より、土師器杯、甕と縄文土器の破片が出土している。

以下に報告する、第16、19、20号土坑、第39、42号ピット、第40、31、34、39、33、35、41、36号土坑は、北東～南西方向にほぼ一直線に連なっている。連続する方向は、概ねN-62°-Eである。

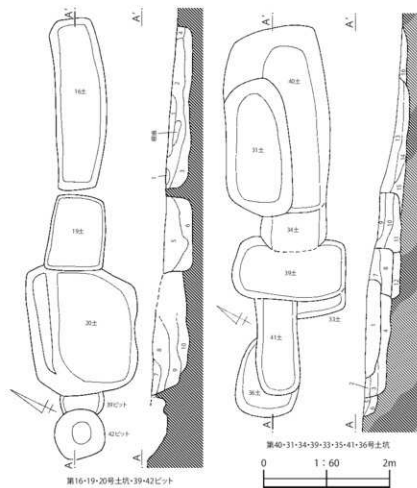
第16号土坑 調査区の東部のD-2、E-2グリッドに位置する。南西で土坑、ピットと重複し、それらを切っている。平面形は北東～南西方向に長い隅丸長方形を呈し、わずかではあるが北にカーブして弓なりになっている。規模は北東～南西方向が2.73m、北西～南東方向が80cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最高で42cmである。底面は起伏がある。遺物は何も出土しなかった。

第19号土坑 調査区の東部のE-2グリッドに位置する。南西で第20号土坑と重複し、それを切っている。平面形は北東～南西方向に長く、南西辺が北東辺よりも長い隅丸台形を呈し、規模は北東～南西方向が1.2m、南西辺が92cm、北東辺が75cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最高で46cmである。底面は平坦である。遺物は、埋没土中より、土師器杯の破片が出土している。

第20号土坑 調査区の東部のE-3グリッドに位置する。北東で第19号土坑に切れ、南西で第39号ピットを切っている。平面形は、南東辺がゆがんでいるものの、北東～南西方向に長い隅丸長方形を呈し、規模は北東～南西方向が2.8m、北西～南東方向が1.74mである。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で59cmである。底面は北西辺に幅10～20cm、底面からの

比高差20cmほどのテラスがある他は、比較的平坦である。遺物は、埋設土中より、土師器環、磁器碗の破片が出土している。

第39号ピット 調査区の東部のE-3グリッドに位置する。北東部を第20号土坑に、西南部を第42号ピットに切られているため、遺存状態はすこぶる悪い。平面形は遺存状態の悪さのため不明ではあるが、北西～南東部の遺存状態から直径68cmの円形と推定される。エレベーション図(第38図)から、壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最高で24cmまで計測できる。底面は比較的



第38図 E地点土坑(2)

第16-19-20号土坑土層説明

- 第1層:暗茶褐色土層(浅間A軽石、火山灰を多量に含む。しまりは弱く粘性はない。)
- 第2層:暗褐色土層(浅間A軽石を均一にロームブロック、炭化物粒を少量含む。しまりはあるが粘性はない。)
- 第3層:明黒褐色土層(火山灰、ローム粒、炭化物粒を少量含む。しまり、粘性共になし。)
- 第4層:茶褐色土層(火山灰、炭化物粒を多量に含む。しまり、粘性共になし。)
- 第5層:明黒褐色土層(火山灰を多量に、ローム粒、炭化物粒を少量含む。しまり、粘性共にない。)
- 第6層:黒褐色土層(火山灰を多量に、ローム粒、炭化物粒を少量含む。しまりはあるが粘性はない。)
- 第7層:暗茶褐色土層(火山灰、ローム粒、ローム小ブロックを含む。しまり、粘性共にない。)
- 第8層:暗茶褐色土層(ローム粒、ロームブロックを多量に、火山灰を均一に含む。しまりはあるが粘性はない。)
- 第9層:明黒褐色土層(ローム粒、ローム小ブロック、白色粒子、炭化物粒を含む。しまり、粘性共にない。)
- 第10層:黒褐色土層(S-K-19の覆土、ローム粒、ロームブロックを多量に、炭化物粒を少量含む。しまりなく粘性弱い。)

第40-31-34-39-33-35-41-36号土坑土層説明

- 第1層:暗褐色土層(ローム粒、ロームブロック、小礫、砂利を均一に含む。粘土質であり、しまりは強い。)
- 第2層:暗褐色土層(ローム粒、粘土粒、浅間A軽石、小砂利を含む。しまりはあるが、粘性はない。)
- 第3層:暗茶褐色土層(ローム粒、火山灰、白色粒子を多量に含む。しまり、粘性共にない。)
- 第4層:暗茶褐色土層(粘土粒、ローム粒、炭化物粒、火山灰を含む。しまりはなく、粘質弱い。)
- 第5層:暗茶褐色土層(白色粒子、ローム粒を多量に、炭化物粒を少量含む。しまりはなく、粘性弱い。)
- 第6層:茶褐色土層(ローム粒、火山灰を多量に、炭化物粒を少量含む。しまり、粘性共に有する。)
- 第7層:暗褐色土層(ローム粒、ロームブロックを多量に、炭化物粒を少量含む。しまりはあるが、粘性はない。)
- 第8層:暗茶褐色土層(ローム粒、ロームブロックを多量に、粘土粒、炭化物粒を含む。しまりは弱く、粘性はない。)
- 第9層:暗茶褐色土層(ローム粒、ローム小ブロック、炭化物粒を含む。しまりはあるが、粘性はない。)
- 第10層:暗茶褐色土層(組成は10層に類似するが、ロームブロックの含有量が多い。)
- 第11層:明褐色土層(ローム粒、ロームブロックを多量に、白色粒子、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共に有する。)
- 第12層:茶褐色土層(ローム粒、ローム小ブロック、炭化物粒を含む。しまり、粘性共に有する。)
- 第13層:暗褐色土層(ローム粒、ロームブロック、粘土粒を多量に、白色粒子、炭化物粒を少量含む。しまりはあるが、粘性はない。)
- 第14層:暗茶褐色土層(ローム粒を多量に、ロームブロック、白色粒子を少量含む。しまり、粘性共に有する。)
- 第15層:暗褐色土層(ローム粒を均一に、ロームブロック、炭化物粒を少量含む。しまり、粘性共にない。)
- 第16層:明黒褐色土層(ローム粒、ローム小ブロック、炭化物粒を微量含む。しまり、粘性共にない。)

平坦である。遺物は何も出土しなかった。

第42号ピット 調査区の東部のE-3グリッドに位置する。北東で第42号ピットと重複し、それを切っている。平面形は直径68cmの円形である。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で30cmである。底面は狭く平坦である。遺物は何も出土しなかった。

第40号土坑 調査区の東部のE-4グリッドに位置する。北西部を第31号土坑に、南西部を第34号土坑に切られている。平面形は北東～南西方向に長い隅丸長方形を呈し、規模は北東～南西方向が2.96m、北西～南東方向が1.64mである。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で12cmである。底面は広く比較的平坦である。遺物は何も出土しなかった。

第31号土坑 調査区の東部のE-4グリッドに位置する。南西部を第31号土坑に切られ、第40号土坑と重複し、それを切っている。平面形は北東～南西方向に長い長楕円形を呈し、規模は北東～南西方向が2.19m、北西～南東方向が1.05mである。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で38cmである。底面は広く比較的平坦である。遺物は、埋没土中より、土師器杯と縄文土器の破片が出土している。

第34号土坑 調査区の東部のF-4グリッドに位置する。南西部を第33、39号土坑と重複し、前者に切られ、後者を切っている。また、北東部を第31、40号土坑と重複し、それらを切っている。平面形は重複する土坑と共に完掘したため正確ではないが、遺存する北西辺と南東辺の形状から北東～南西方向にわずかに長い隅丸長方形を呈すと推測される。規模は北東～南西方向が1.02m、北西～南東方向が94cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最高で42cmである。底面は比較的平坦である。遺物は、埋没土中より、土師器杯の破片が出土している。

第39号土坑 調査区の東部のF-4グリッドに位置する。上部を第33号土坑に、南西辺を第41号土坑に、北東辺の中央を第34号土坑に切られている。平面形は北西～南東方向に長い隅丸長方形を呈すと推測される。規模は北西～南東方向が1.80m、北東～南西方向が94cmである。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で44.5cmである。底面は広く比較的平坦である。遺物は何も出土しなかった。

第33号土坑 調査区の東部のF-4グリッドに位置する。下位に第33号土坑と、北西辺に第34号土坑と重複し、それらを切っている。南西辺を第35、41号土坑に切られている。平面形は重複する土坑と共に完掘したため不明であるが、南西隅と南西辺の遺存状態から北西～南東方向に長い隅丸長方形を呈すと推測される。規模は北西～南東方向が76cm以上、北東～南西方向が1.11mである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは最高で38cmである。底面は比較的平坦である。遺物は片岩の破片以外何も出土しなかった。

第35号土坑 調査区の東部のF-4グリッドに位置する。土坑の掘り込みが地山まで到達しておらず、重複する土坑と共に完掘したために、遺存しなかった。下位に第39、41号土坑と重複し、それらを切っている。平面形は不明であるが、規模はセクション図から北東～南西方向のみ判明しており、1.54mである。壁は北東壁がほぼ垂直に立ち上がり、南西壁が緩やかに傾斜して立ち上がる。確認面からの深さは最高で35cmである。底面は比較的平坦である。遺物は、埋没土中より、土師器杯の破片が出土している。

第41号土坑 調査区の東部のF-4グリッドに位置する。上位に第35号土坑と重複し、それに

切られている。北東辺に第33、39号土坑と、南西部に第36号土坑と重複し、それらを切っている。平面形は北東～南西方向に長い隅丸長方形を呈し、規模は、北東～南西方向が1.63 m、北西～南東方向が66cmである。壁は傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で41cmである。底面は比較的起伏がある。遺物は何も出土しなかった。

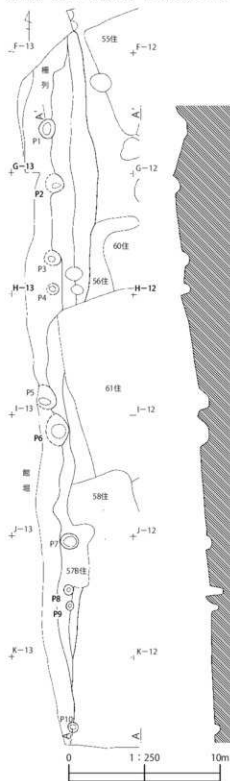
第36号土坑 調査区の東部のF-5グリッドに位置する。東部を第41号土坑と重複し、それに切られている。平面形は大半を第41号土坑に切られているため正確ではないが、遺存する南西辺と北西辺の形状から東西方向に長い楕円形を呈していると推測される。規模は東西方向が1.26 m、南北方向が96cmである。壁は傾斜して立ち上がり、確認面からの深さは最高で22cmである。底面は比較的平坦である。遺物は何も出土しなかった。

第4節 館堀跡・柵列 (第39図、図版7)

館堀跡 調査区の西端に位置する。調査区の西端に沿って、調査区の北端から南端まで検出された。検出されたのは堀跡の東半分であり、西半分は調査区外に位置する。走向は $N-1^{\circ}-E$ であり、ほぼ南北である。調査区の西端の住居跡群を切っている。横断面形状は、底面の狭いV字形で、堀の縁付近に1.0～1.5 m幅の犬走り状の段差が認められた。柵列のピットはこの段差の縁に沿って検出されている。確認面からの深さは、1.10 m前後である。C地点、F地点で検出された、真鏡寺館跡の堀の一部とみられる。堀の内縁側には、F地点で検出されたような土塁は検出されなかったが、走向の近い柵列が検出されている。館堀の埋没土は、上層にAs-A軽石が含まれるが、下層には含まれていないため、As-A軽石の降下以前に大部分が埋没していたと推定される。

出土遺物は、土師器の甕、坏の破片が大量に出土しているが、主に8～9世紀のものであり、館堀に切られた住居跡に由来するものであろう。

柵列 調査区の西端、館堀の縁にて、ほぼ一直線に並ぶピットの列を柵列と判断した。ピットは、主に2基づつの組で、5 m前後の間隔で並んでいる。走向は、 $N-3^{\circ}-W$ で、ほぼ南北である。館堀の走向とも大きく変わるわけではないので、館堀に関連するものかもしれない。ピットは、直径5～15cmの楕円形で、確認面からの深さは、40～45cmである。



第39図 E地点館堀跡・柵列

第V章 ま と め

E地点の調査は、真鏡寺後遺跡の第5次調査であり、本遺跡の南部に所在する真鏡寺館跡の内側の初めての調査であった。本調査後、F地点、G地点と続けて真鏡寺館跡内の調査が行われており、館跡の内部の状況が徐々に明らかになり始めている。

E地点では、9軒（建て替えを含めれば13軒）の竪穴住居跡、2棟（建て替えを含めれば4棟）の掘立柱建物、1条の館堀、1列の柵列、200基以上の土坑・ピットの調査を行なっている。

竪穴住居跡は、分布状況から館堀を越えた西側に住居群が広がることが予想される。住居跡の使用時期ならびに廃絶時期は、7世紀ごろから9世紀の終わりごろまでと推定される。カマドの焚き口付近に小ピットをもつもの（第55、59、61号住居跡）ともないもの（第54、57、58、60、63号住居跡）とに分かれる。

掘立柱建物跡は、調査時に、第55号住居跡と重複する形で1棟（第1号掘立柱建物跡）が検出されていたが、整理調査時の検討により建て替えられた3棟に分かれると判断し、柱穴を共有関係、柱穴の切り合い関係、建物の構造、規模の類似性から、建て替えの順序を明らかにした。整理調査時に新たに認定した第2号掘立柱建物跡は、長軸方向と立地が第1号掘立柱建物跡や竪穴住居跡群と異なるため、館跡に関わる建物かもしれない。他に、東部に大量に集中するピット群も掘立柱建物跡を構成する可能性があるが、柱穴間の距離に規格外性が認められなかったため、建物跡と認定することはしなかった。今後の課題である。

調査区の西端で検出された館堀跡は、現地表面に残るランドマークと併せて、C、F地点で検出された館堀跡に接続すると推定される。F地点で検出されたような堀の内側の土塁跡は検出されなかったが、柵列と推定されるピット列が堀に沿って検出された。柵列は、柱穴が2基づつセットで並んでいるようであるが、このセットが同時期に使用されたものなのか、建て替えによるものかは、明らかにすることはできなかった。

出土遺物では、第55号住居跡から出土した白玉の一部が接合することが判明した。色調から二つの石材に分かれると推定される。直接接合するわけではないが、それぞれの石材で、一本の棒状の材料にまとまるようであり、白玉の側面に残る擦痕の状況から、製作中のものかもしれない。

第5号住居No2、第9号住居No6の土師器の坏は、口縁部外側に残るナデが、一周する直前で止まっている。このナデは、一定の幅で途切れることなくほぼ一周していることから、一度につけられたと判断される。土師器坏のナデ調整に回転台ないしロクロが使用されている可能性が指摘されている（石本2009）が、この二つの坏のナデの痕跡は、回転台もしくはロクロによる調整の証拠と考えたい。

真鏡寺館跡内の調査であったが、館跡に関わる建物等の遺構を明らかにすることはできなかった。

- <参考文献> 鈴木徳雄、1983「古代北武蔵における土師器製作手法の調査」『土曜考古』7、pp.13-21
鈴木徳雄、1984「いむゆる北武蔵系土師器杯の動態」『土曜考古』9、pp.47-76
鈴木徳雄、1987「真鏡寺後遺跡Ⅰ」児玉町教育委員会
鈴木徳雄、1988「真鏡寺後遺跡Ⅱ」児玉町教育委員会
恋河内 昭彦、1991「真鏡寺後遺跡Ⅲ」児玉町教育委員会
藤崎 薫、1992「奈良・平安時代の遺物について」『倉庫原・楡下遺跡Ⅳ』倉庫原・楡下遺跡調査会、pp.310-321
鶴岡正昭・穴野 佐紀子、1997「武蔵国の窯跡出土の須恵器」『東国の須恵器』古代史研究会、pp.148-155
鶴岡正昭、1997「律令制成立期の須恵器の系譜」『東国の須恵器』古代史研究会、pp.156-169
江口 桂、1997「律令制変遷期の須恵器の系譜」『東国の須恵器』古代史研究会、pp.170-183
石本 弘、2009「栗西式土師器杯製作技法に関する一試案」『福島県文化財センター白河館 研究紀要 2008』、pp.101-106
恋河内 昭彦、2009「真鏡寺後遺跡Ⅳ」本庄市教育委員会



第54号住居跡（西から）



第54号住居跡カマド（西から）



第55号住居跡・E地点第1号掘立柱建物跡
（南から）

図版 2



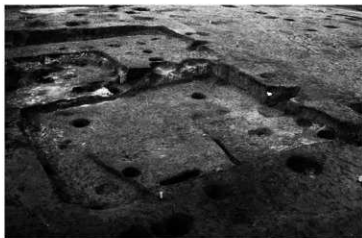
第 57 号住居跡 (西から)



第 57 号住居跡カマド (西から)



第 58 号住居跡カマド (西から)



第 59 号住居跡 (南から)



第 59 号住居跡遺物出土状態 (南から)

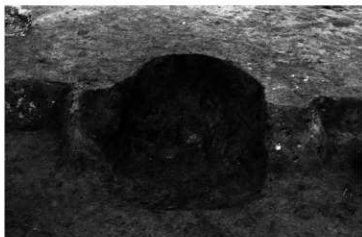


第 59 号住居跡カマド (西から)

図版 4



第60号住居跡（南から）



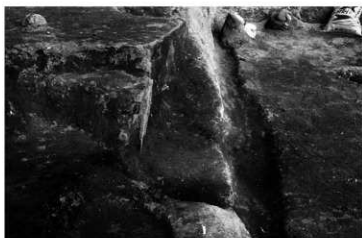
第60号住居跡カマド（西から）



第60・62号住居跡掘り方（南から）



第61号住居跡（南から）



第61号住居跡カマド（西から）



第63号住居跡（西から）

図版 6



第63号住居跡カマド（西から）



E地点第2号掘立柱建物跡（西から）



E地点第14～20号土坑・
第39・42号ピット跡（南から）



E地点第31～41号土坑（南から）



E地点東端ピット群（南から）

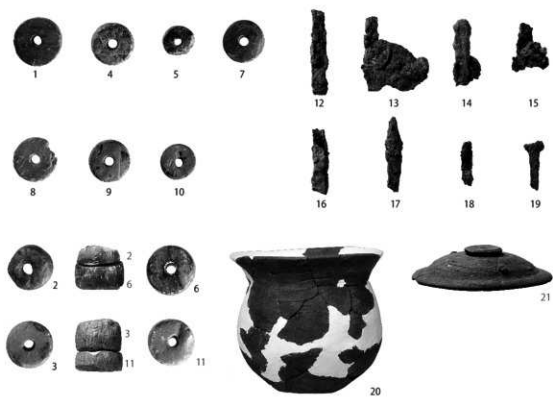


E地点館堀（西から）

图版 8



第 54 号住居跡出土遺物



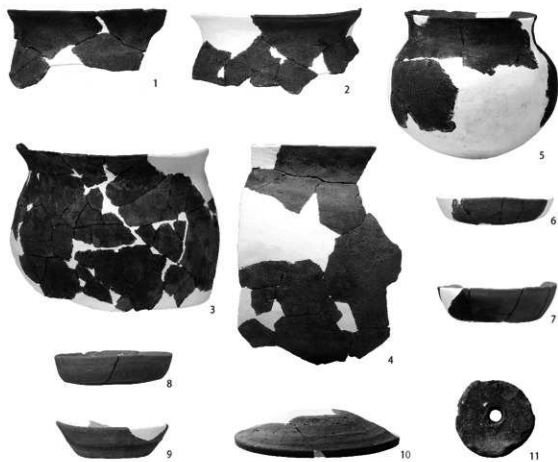
第 55 号住居跡出土遺物



第 57 号住居跡出土遺物



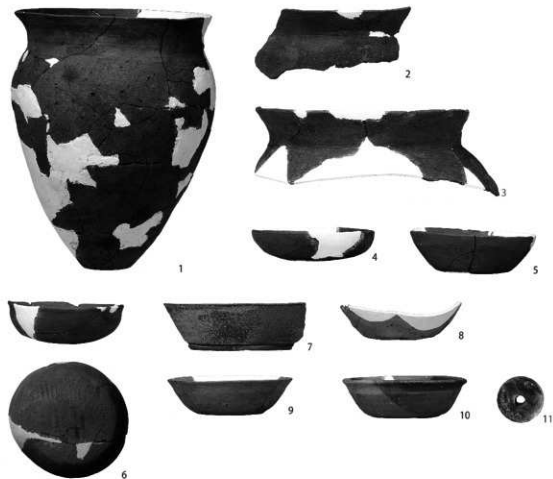
第 58 号住居跡出土遺物



第 59 号住居跡出土遺物



第 60 号住居跡出土遺物



第 61 号住居跡出土遺物



第 63 号住居跡出土遺物



E 地点第 1 号掘立柱建物跡出土遺物

報告書抄録

フリガナ	シンキョウジウシロイセキV							
書名	真鏡寺後遺跡V							
副書名	E地点の調査							
シリーズ	本庄市遺跡調査会報告書	巻次	第31集					
編著者	村上章義							
編集機関	本庄市遺跡調査会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 TEL 0495-25-1185							
発行日	西暦2010年(平成22年)8月31日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡					
シンキョウジウシロイセキ 真鏡寺後遺跡 (E地点)	シンキョウジウシロイセキ 本庄市児玉町 シオノアザシシンキョウジ 塩谷字真鏡寺 の 90-2他	112119	54-107	36°11'24" (36.19)	139°6'4"5 (139.10125)	1988.03.01 ～ 1988.05.10	約 1,118 m ²	牛舎 建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
真鏡寺後遺跡 (E地点)	集落	飛鳥	竪穴住居1、 掘立柱建物1	土師器小型甕、 須恵器蓋、 白玉、鉄製品	掘立柱建物は建て替え3棟。 「天」墨書須恵器蓋。 白玉は一部接合。			
	集落	奈良 ・ 平安	竪穴住居9	土師器甕、坏、鉢、 須恵器杯、碗、蓋、 土製紡錘車、白玉	一部住居は正確な時期不明。 墨書須恵器蓋。			
	館	中世	堀1、櫓列1					
		不明		掘立柱建物1、 土坑17、ピット2、 土坑・ピット群				

本庄市遺跡調査会報告書第31集

真鏡寺後遺跡Ⅴ
—E地点の調査—

平成22年8月31日 印刷

平成22年8月31日 発行

発行／本庄市遺跡調査会
埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号
(本庄市教育委員会文化財保護課内)

印刷／上毎印刷工業株式会社